

はじめに

日本の社会を取り巻く環境は大きく変化し、国際化・情報化や少子・高齢化は、今後さらに加速することが予測されます。こうした社会の急激な変化の中で、これからの子どもたちに必要な力は、自分で課題を見付け、主体的に判断し、問題を解決していく資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性であると考えます。

このような中、国においては、生徒一人ひとりの個性をより重視した教育の実現をめざすものとして、平成10年6月に「学校教育法等の一部を改正する法律」を制定し、平成11年4月から、6年間の中高一貫教育への道を開いたところです。これを受けて、従来の中学校・高等学校の制度に加えて、生徒や保護者が6年間の一貫した教育課程や学習環境の下で学ぶ機会を選択できるようになりました。

本県においても、平成10年3月に「山口県教育ビジョン」を策定し、魅力ある学校づくりの一環として、中高一貫校の導入の方向が示されました。これを受け、近隣の中学校とともに下関地域における中高一貫教育の在り方について研究を重ね、平成16年4月に「地域の特性を生かし、国際化の進展に対応した学校づくり」というコンセプトのもと、教育目標を「ゆとりの中で生きる力を育み、誇りと自信をもって世界に飛躍する人材の育成」と定め、本県初の中等教育学校として開校しました。単に中学校と高等学校を合わせたものではなく、6年間の教育を計画的・継続的に行う中等教育学校の特性を十分に生かした教育課程や指導方法等を開発していくことをめざして、開校と同時に研究開発学校の指定を受け、平成18年度までの3年間、様々な方面から御指導、御助言をいただきながら研究を進めてまいりました。

今年度は延長1年次という位置付けで、教育課程や教科等の効果的な指導方法、総合的な学習の時間における「海峡学」、「東アジア文化入門」やチューター制についての新たな展開を進めるとともに、英語、数学におけるリトル・ティーチャー制の授業や習熟度別授業、基礎・基本期から充実・発展期への接続などについても本格的な研究を始めました。

また、これまで取り組んできた3年間の研究の成果や課題を踏まえ、研究開発全体を見直すという観点から、小学校から入学してきた1期生たちが後期課程に進級したことによる新たな取組等についても掲載しています。

本校はようやく開校4年を終えたところであり、検討・修正すべき課題は山積みになっておりますが、今後も本研究開発の成果を踏まえて、確かな学力と豊かな人間性を育むための取組を続け、誇りと自信をもって世界に飛躍する人材を育成していきたいと考えております。本書を御一読いただき、御指導をいただければ幸いです。

最後に、本研究開発にあたり、御指導御支援等をいただきました運営指導委員会の各委員の皆様、並びに山口県教育委員会関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

山口県立下関中等教育学校
校長 永 富 康 文

目 次

はじめに

第1部	平成19年度研究開発実施報告書（要約）	1
第2部	平成19年度研究開発実施報告書（本体）	
I	学校の概要	
1	沿革	13
2	学年・課程・学科別生徒数、学級数	13
3	教職員数	13
4	コンセプト（教育理念）	13
5	教育理念図	14
II	研究開発の概要	
1	研究開発課題	15
2	研究の概要	15
3	研究仮説	15
4	研究組織	16
III	研究開発の経緯	18
IV	研究開発の内容	
1	教育課程	
(1)	教育課程・教科指導について	19
(2)	必要となる教育課程の特例	19
(3)	教育課程表	21
(4)	教育課程の効果と課題	23
2	生徒の学力についての考察	26
3	特色ある学習指導方法・内容	
(1)	接続テストとその後の補充授業	28
(2)	理科課題研究（4回生「理科Z」）	29
4	リトル・ティーチャー制	30
5	教員研修	32
6	総合的な学習の時間「海峡学」「東アジア文化入門」	34
7	オーストラリア語学研修旅行	36
8	チューター制	39
9	韓国・中国との交流	41
10	地域とともに歩む学校づくり	42
11	運営指導委員会	44
V	実施の効果	45
VI	研究開発実施上の問題点及び今後の研究開発の方向	48

平成19年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

中等教育学校の特性を生かし、確かな学力と豊かな人間性を育むための一貫性、継続性のある効果的な教育課程及び指導方法の研究開発

本校は、学校設立のコンセプトを「地域の特性を生かし、国際化の進展に対応した学校づくり」とし、そのコンセプトに沿って、教育目標を「ゆとりの中で生きる力を育み、誇りと自信をもって世界に飛躍する人材の育成」と定めている。その目標を達成するためには、単なる中学校＋高等学校としての6年間ではなく、中等教育学校としての特性を最大限に生かした6年一貫の効果的な教育課程を編成し、学習指導を行うことによって、確かな学力を育むとともに、学習以外の諸活動や人とのかかわりを通して広い視野や豊かな人間性を育んでいく必要がある。

以上のような理由により、本研究開発の課題を「中等教育学校の特性を生かし、確かな学力と豊かな人間性を育むための一貫性、継続性のある効果的な教育課程及び指導方法の研究開発」と設定した。

2 研究の概要

生徒が一つの学校で6年間を過ごすという中等教育学校の特性を生かし、次の二つの方法等について研究開発を行う。

- 前・後期課程を一体的にとらえた効果的な教育課程及び教科等の指導方法
- 幅広い年齢層の生徒が共に生活し、学び合う中で豊かな人間性を育む諸活動の工夫

具体的には、①1回生から4回生までを「基礎・基本」期、5・6回生を「充実・発展」期と位置付け、中学校・高等学校の学習内容を精選・再配列した教育課程・教科指導及びそれを生かすための適切なガイダンス、②6年間を見通した『総合的な学習の時間』（下関や周辺地域を多面的に研究する「海峡学」、韓国・中国の文化や言語について学ぶ「東アジア文化入門」）の内容・実施方法、③授業クラスとは別の少人数集団である「チューター会」で行う諸活動、④上級生が下級生の授業において教員をサポートする「リトル・ティーチャー制」等について研究していく。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

本校は、本県における最初の中教育学校であり、次のような特性がある。

- ・ 生徒が一つの学校で6年間を過ごすため、6年間を見通した継続的な学習指導、進路指導、生活指導等を行うことができる。
- ・ 1回生から6回生まで、成長・変化の著しい時期に幅広い年齢層の生徒たちが共に学校生活を送ることになる。
- ・ 本校の所在地である下関は本州の最西端に位置し、古くから海外との交流の玄関口として重要な役割を果たしてきた。特に東アジア諸国とのかかわりは深く、現在も文化的、経済的交流が盛んである。

これらの中等教育学校としての特性や地域的特性を最大限に生かした教科指導・進路指導・生活

指導等を行うことによって、確かな学力と豊かな人間性をもち、同時にコミュニケーション能力、自己表現力を身に付け、世界に飛躍する人材を育成することができると思う。

研究開発の中心となるのは、次のものである。

- 中等教育学校の特性を生かす教育方法の開発
 - ・ 6年間を見通した教育課程・教科指導
 - ・ チューター制
 - ・ リトル・ティーチャー制
- 下関の地域的特性を生かす教育方法の開発
 - ・ 総合的な学習の時間としての「海峡学」「東アジア文化入門」
 - ・ 語学教育、コミュニケーション能力、自己表現力の育成

(2) 教育課程の特例

[前期課程]

国語・社会・数学・理科・英語の授業時数を各学年バランスよく増加し、選択教科としてではなく、増時数した必修教科として全員が学習する。各教科の年間授業時数を次のとおりとする。

	国 語	社 会	数 学	理 科	外国語 (英語)
1 回生	1 5 8 (+18)	1 2 3 (+18)	1 4 0 (+35)	1 4 0 (+35)	1 0 5 (+英会話として35)
2 回生	1 4 0 (+35)	1 2 3 (+18)	1 4 0 (+35)	1 4 0 (+35)	1 2 3 (+18) (+英会話として35)
3 回生	1 4 0 (+35) (書写を除く)	1 5 8 (+73)	1 4 0 (+35)	1 2 3 (+43)	1 4 0 (+35) (+英会話として35)

※ () 内は、学校教育法施行規則に示された時数との比較

- ・ 教育課程表上の総授業時数を1,120単位時間とする。
- ・ 1～3回生において、選択教科「情報技術」を設定する。「情報技術」は、1・2回生の「技術・家庭」の35時間ずつを代替するものとし、3回生での実施分は、後期課程における選択必修科目「情報A」の1単位分を代替するものとする。
- ・ 1～3回生において、選択教科「英会話」を設定する。
- ・ 3回生において、選択教科「書道」を設定する。3回生の「国語」の「書写」は、この「書道」によって代替する。

[後期課程]

4回生において、前期課程との連続性を確保するため、次の学校設定科目を設け、必修科目を代替する。

「国語Z」(5単位) … 「国語総合」(4単位) を代替する。

「社会Z」(3単位) … 「現代社会」(2単位)・「世界史A」(2単位) を代替する。

「数学Z」(5単位) … 「数学I」(3単位)・「数学A」(2単位) を代替する。

「理科Z」(4単位) … 「理科総合A」(2単位)・「理科総合B」(2単位) を代替する。

「英語Z」(4単位) … 「英語I」(3単位) を代替する。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

ア 教育課程、各教科指導について

- (ア) 国語・社会・数学・理科・英語については6年間を見通した上で、一貫性・継続性を生かした効果的な指導をめざしていく。
- 「基礎・基本」期である1～4回生においては、各教科の中学校・高等学校の学習内容を精選・再配列し、その基礎・基本と考えられる事柄について定着を図る。前期課程・後期課程で相互に関連する内容は、その学習効果・効率を考慮した上で、可能なものは1～3回生のうちに重点的に取り上げるようにする。そのため、1～3回生においては、それぞれの教科の授業時間をバランスよく増やすとともに、4回生においては、後期課程への連続性を確保するため「国語Z」「社会Z」「数学Z」「理科Z」「英語Z」を履修し、それぞれ高等学校の必修科目を代替するものとする。
- (イ) 1～4回生において、「英会話」を設ける。授業は少人数で行い、本校専属のALTとJTEのチーム・ティーチングとする。
- (ウ) 1～3回生において、選択教科「情報技術」を設定する。「情報技術」は、1・2回生の「技術・家庭」の35時間ずつを代替するものとし、3回生での実施分は、後期課程における選択必修科目「情報A」の1単位分を代替するものとする。
- (エ) 1～3回生の「数学」、英語」、4回生の「数学Z」、「英語Z」、1～4回生の「英会話」において、少人数授業を行う。
- (オ) 2回生「数学」において、代数分野と幾何分野を並行履修とする。
- (カ) 3・4回生「数学」「数学Z」、3～5回生「英語」「英語Z」「英語Ⅱ」において、習熟度別授業を行う。数学では「マスター」「スタンダード」「ベーシック」の三つのコース、英語では「発展」「標準」の二つのコースを設け、進路指導や教育相談等を絡めたガイダンスを行った上で、本人の希望を基本としたクラス編成とし、それぞれの進路希望と到達度に合った学習を進めていく。
- (キ) 豊かな情操を育み、後期課程における芸術科目との一貫性をもたせるため、3回生では「音楽」「美術」に加えて、選択教科「書道」を設定する。3回生の「国語」の書写は、この「書道」によって代替する。
- (ク) 1回生においては、各教科の評価として、定期考査の代わりに、単元ごとの到達度目標に応じた到達度テストを実施する。その結果により、生徒の理解度、定着度を把握し、授業改善に資する。また、理解・定着の不十分な生徒には補充授業を実施して、その単元の学習内容についての理解を深めるためのきめ細かな指導を行い、さらに演習を繰り返すことによって確実な定着を図る。

イ チューター制について

- (ア) 授業クラスとは別に、同学年の少人数集団であるチューター会を編成する。
- (イ) 1・2回生において週3回、3回生において週1回、25分間の「チューター会の時間」を実施する。
- (ウ) 後期課程においては、朝・夕各10分間の「チューター会の時間」を実施する。

ウ 総合的な学習の時間について

国際都市下関の地域的特性を生かすために、総合的な学習の時間を活用する。各学年1単位(年間35時間)を6年間通して学ぶ「海峡学」では、海峡都市・下関を多面的に研究して、様々な学習の成果を統合し、論理的に考え、表現する力を身に付け、生きる力を育む。前期課程では「海峡学」とは別に、年間35時間を「東アジア文化入門」とし、韓国人・中国人講師から、それぞれの国の文化や言語について学び、隣国に対する関心を深め、国際感覚の基礎を身に付けるとともに、後期課程における外国語選択必修科目「ハングル」「中国語」の学習の準備を行う。

エ リトル・ティーチャー制について

学習の場で生徒同士が学年の枠を越えて交流できる制度として、「リトル・ティーチャー制」を導入する。後期課程の生徒でその教科について関心、学力の高い生徒、教育系の進路をめざす生徒が、前期課程もしくは4回生の授業に教員のアシスタントとして参加する。

オ その他

- (ア) 生徒会活動、各種委員会活動において、上級生主導のもと、前期課程生徒も組織の一員として積極的に参加し、自主性・主体性を育む。
- (イ) 部活動については、前期課程生徒は可能な範囲において、後期課程生徒とともに活動する。

(2) 研究の経過

	実施内容等
第四年次 (延長1年目) <当該年度>	(1) 前年度までの各研究事項についての検討及び改善 (2) 教育課程・教科指導 <ul style="list-style-type: none"> ① 4回生学校設定科目「Z科目」について ② ガイダンスの在り方について <ul style="list-style-type: none"> ア 新入生に対するガイダンス イ 「充実・発展」期の科目選択についてのガイダンス ③ 前期課程と後期課程の接続について <ul style="list-style-type: none"> ア 学習内容の連続性と、切替の方法について イ 評価の連続性について ④ 各教科の授業改善について ⑤ 教育課程・教科指導の工夫・改善 (3) 総合的な学習の時間 <ul style="list-style-type: none"> ① 4～6回生の総合的な学習の時間「海峡学」の内容・実施方法 ② 1～3回生の「海峡学」「東アジア文化入門」の題材の選択と配列の見直し ③ 「東アジア文化入門」と後期課程外国語科選択必修科目「ハングルⅠ・Ⅱ・Ⅲ」「中国語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」との接続について (4) チューター制 <ul style="list-style-type: none"> ① チューター会における活動の内容・実施方法についての再検討 ② より効率的なチューター会の運営について (5) リトル・ティーチャー制 <ul style="list-style-type: none"> ① 実技・実習を伴う教科・科目における実施について <ul style="list-style-type: none"> ア 「保健体育」「理科」における継続実施の検討 イ ア以外の教科における実施の検討

	<ul style="list-style-type: none"> ② 行事の中での実施について <ul style="list-style-type: none"> ア 英語サマーセミナー イ 百人一首大会 (6) 学校運営等について <ul style="list-style-type: none"> ① 語学研修旅行の成果と課題、改善 ② 海外姉妹校との交流 ③ 後期課程におけるスピーチ・ディベート大会について
第五年次 (延長2年目)	<ul style="list-style-type: none"> (1) 前年度までの各研究事項についての検討及び改善 (2) 教育課程・教科指導 <ul style="list-style-type: none"> ① 「基礎・基本」期から「充実・発展」期への接続について ② 習熟度別授業の効果的な実施方法についての検討 ③ 教育課程・教科指導の工夫・改善 (3) 総合的な学習の時間 <ul style="list-style-type: none"> ① 総合的な学習の時間の活動における学校外の関係機関との効果的なかかわり方 ② 海峡学における高大連携の可能性について ③ 卒業研究の位置付けとその内容・実施方法 (4) チューター制 <ul style="list-style-type: none"> ① チューター会と学級のかかわりについて ② 学年・学級・チューター会におけるチューターの役割について (5) リトル・ティーチャー制 <ul style="list-style-type: none"> ① 実技・実習を伴わない教科・科目における実施について <ul style="list-style-type: none"> ア 数学科、マスターコースからの生徒派遣の検討 イ 外国語科、発展コースからの生徒派遣の検討 (6) 学校運営等について <ul style="list-style-type: none"> ① 海外姉妹校との交流：人的交流の検討 ② 後期課程におけるスピーチ・ディベート大会について
第六年次 (延長3年目)	<ul style="list-style-type: none"> (1) 前年度までの各研究事項についての検討及び改善 (2) 教育課程・教科指導 <ul style="list-style-type: none"> ① 6年間を見通した教育課程の効果と課題 ② ガイダンス機能の在り方 ③ 教育課程・教科指導の工夫・改善 (3) 総合的な学習の時間 <ul style="list-style-type: none"> ① 「海峡学」6年間の総括 ② 卒業研究のまとめ方、発表会の実施方法について (4) チューター制 <ul style="list-style-type: none"> ① チューター会の効果的・発展的なかかわり方 (5) リトル・ティーチャー制について <ul style="list-style-type: none"> ① 継続的なリトル・ティーチャー制の実施 ② リトル・ティーチャーの履修の認定や評価の在り方 (6) 学校運営等について <ul style="list-style-type: none"> ① 海外姉妹校との交流 ② 学校行事の妥当性や実施方法についての見直し ③ 生徒会組織の編成や活動の在り方

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第四年次 (延長1年目) <当該年度>	<p>(1) 学力調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1 回生対象に月 1 回程度到達度テストを、2 回生以上を対象に年間 6 回定期考査を実施する。 ・ 年 3 回実力テストを実施する。 ・ 1～3 回生で英語技能検定試験を、3～5 回生で英語コミュニケーション能力テストを実施する。 <p>(2) アンケート調査</p> <p>全校生徒対象</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 年 2 回程度、生徒による授業評価を実施する。 ・ 年 2 回 (5 月と 2 月)、意識調査を実施する。 ・ 学校行事終了ごとにアンケート調査を実施する。 ・ リトル・ティーチャーの活動後、アンケート調査を実施する。 <p>教職員対象</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 年 2 回 (5 月と 2 月)、学校運営や教科指導、生徒指導等に関するアンケート調査を実施する。 ・ 学校行事終了後ごとにアンケート調査を実施する。 <p>保護者対象</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 年 2 回、学校運営や生徒の実態についてのアンケート調査を実施する。 <p>(3) そ の 他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究授業後、授業担当者と参観者による研究協議を行う。 ・ 運営指導委員会を年 3 回開き、指導助言を得る。 ・ 学校評議員会を年 2 回開き、指導助言を得る。 ・ 総合的な学習の時間の発表会を一般公開し、地域の人々や担当以外の教員からの評価・助言を受ける。
第五年次 (延長2年目)	<p>(1) 学力調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1 回生対象に月 1 回程度到達度テストを、2 回生以上を対象に年間 6 回定期考査を実施する。 ・ 年 3 回実力テストを実施する。 ・ 1～3 回生で英語技能検定試験を、3～5 回生で英語コミュニケーション能力テストを実施する。 <p>(2) アンケート調査</p> <p>全校生徒対象</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 年 2 回程度、生徒による授業評価を実施する。 ・ 年 2 回 (5 月と 2 月)、意識調査を実施する。 ・ 学校行事終了ごとにアンケート調査を実施する。 ・ リトル・ティーチャーの活動後、アンケート調査を実施する。 <p>教職員対象</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 年 2 回 (5 月と 2 月)、学校運営や教科指導、生徒指導等に関するアンケート調査を実施する。 ・ 学校行事終了後ごとにアンケート調査を実施する。 <p>保護者対象</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 年 2 回、学校運営や生徒の実態についてのアンケート調査を実施する。 <p>(3) そ の 他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究授業後、授業担当者と参観者による研究協議を行う。 ・ 運営指導委員会を年 3 回開き、指導助言を得る。 ・ 学校評議員会を年 2 回開き、指導助言を得る。 ・ 総合的な学習の時間の発表会を一般公開し、地域の人々や担当以外の教員からの評価・助言を受ける。
第六年次 (延長6年目)	<p>(1) 学力調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1 回生対象に月 1 回程度到達度テストを、2 回生以上を対象に年間 6 回定期考査を実施する。 ・ 年 3 回実力テストを実施する。 ・ 1～3 回生で英語技能検定試験を、3～5 回生で英語コミュニケーション能力テストを実施する。

	<p>(2) アンケート調査</p> <p>全校生徒対象</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年2回程度、生徒による授業評価を実施する。 ・年2回（5月と2月）、意識調査を実施する。 ・学校行事終了ごとにアンケート調査を実施する。 ・リトル・ティーチャーの活動後、アンケート調査を実施する。 <p>教職員対象</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年2回（5月と2月）、学校運営や教科指導、生徒指導等に関するアンケート調査を実施する。 ・学校行事終了後ごとにアンケート調査を実施する。 <p>保護者対象</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年2回、学校運営や生徒の実態についてのアンケート調査を実施する。 <p>(3) その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究授業後、授業担当者と参観者による研究協議を行う。 ・運営指導委員会を年3回開き、指導助言を得る。 ・学校評議員会を必要に応じて開き、指導助言を得る。 ・総合的な学習の時間の発表会を一般公開し、地域の人々や担当以外の教員からの評価・助言を受ける。
--	--

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

ア 生徒への効果

(ア)「他の学校とは違う環境の中で学校生活を送ることができている」ということを、どの学年の生徒も肯定的にとらえている。アンケートでは89%の生徒が「本校には、他校にないよい特徴がある」と答えている。特に、チューター制や特色ある教科指導、リトル・ティーチャー制などの本校の研究開発の柱となる取組は、概ね生徒から評価されている。また、80%の生徒が「本校に入学してよかった」と答えている。

(イ) 9月に行ったアンケートでは「学級以外にチューター会という制度があることはよい」と答えた生徒が1年生91%、2年生86%、3年生65%、4年生74%となった。また「チューター会でやる活動に積極的に取り組んでいる」と答えた生徒は、1年生87%、2年生84%、3年生68%、4年生75%であり、学年によりチューター会制度へのとらえ方はまちまちであるものの、生徒にとって本校での学校生活の基本単位は学級ではなく「チューター会」であることを認識して学校生活を送っていることがわかる。今年度から学級担任、副担任という呼称をなくし、チューター会のシステムをより強調する形をとった。この結果、学級は主に学習の場、チューター会は緊密な人間関係の中で様々な活動を行う場という役割が明確になり、チューター会を担当する教員にとっても個別指導がより行いやすくなった。2人のチューターで学級を担当することにより、お互いに助け合い、お互いのよいところを出し合って高め合うという効果が生まれている。ただ、前期課程は学級で過ごす時間が多いため、生徒指導的な問題も学級で起こることが多い。学級が果たす機能や役割を考えた指導も引き続き不可欠である。一方、後期課程は毎日7時間授業のため、朝・夕10分間ずつのチューター会では、委員会等の話し合い活動も十分にできていない。チューター会の時間の確保と、朝夕の10分間の使い方について更なる研究を進めていく必要がある。

(ウ) 1・2年生では、「学校に来るのが楽しい」という生徒は90%をこえているものの、3・4年生ではその割合が減少している。学習内容の難化や生徒の発達段階として予想できる結

果ではあるが、保健室やカウンセラーへの相談件数も増えていることから、ガイダンス機能を充実させるとともに、教育相談等により生徒の変化・悩みにいっそうきめ細かく対応する必要がある。日々の学校生活の中で生徒たちが工夫し、自らの生活スタイルを見付け出して充実感や達成感を味わえるような学校生活を過ごせるよう、学校側のバックアップ体制を作っておく必要がある。

- (エ) 2・3・4回生において「学習の仕方がわからない」と答える生徒が増えている。4回生は高等学校の学習内容に入ったことで、難易度や授業のスピードがあがったことをその理由に挙げる生徒が多い。また、義務教育が終了したことで様々な面で自由が生まれ、各個人の自主性に任せられることに戸惑いを見せ、自分のペースを作れていない生徒もいる。4回生には基礎・基本期の最終学年であることを自覚させ、早いうちに自分なりの学習スタイルを確立して5回生以降の充実・発展期で実力を存分に発揮できるよう、継続性のある支援体制を作っておく必要がある。また、前期課程においても「普段、家庭学習をしない」生徒の割合が30%を超えている。2・3回生においては、高校受験がないために中だるみの時期が長いように感じられるが、各教科の学習のみならず、海峡学で行う職業調べ(1回生)・職場体験学習(2回生)・大学オープンキャンパスへの参加(3回生)や、進路講演会(各学年)など、本校で取り組んでいる様々な体験活動と絡めながら、学習する意義を自らの体験の中から体得させたい。

イ 教員への効果

- (ア) 開校4年目を迎え、前期課程・後期課程の両方の授業を担当する教員は半数を超えた。開校当初は授業のレベルをどこに合わせたらよいのかなど、教える立場の教員が戸惑うことも多かったが、少人数指導・習熟度別授業・選択教科が増えたこと、また、各教科でそれぞれ授業研究やリトル・ティーチャー制の授業を行ったことにより、自然な形で生徒の発達段階に応じた授業が行えるようになった。また、学校行事や部活動の指導を通して、前・後期の生徒と一緒に活動する場面が増えたことも、生徒理解の面で役に立っている。
- (イ) 昨年度完成した「Study Guide」は教員にも大変好評で、チューターや教科担当として生徒にかかわる際に、6年間の一貫教育を意識した指導がしやすくなった。また、「Study Guide」の修正やシラバスの再検討を毎年各教科にお願いしているため、年を追うごとに生徒の実態に合わせたものに改善されている。「本校が一般の中学校とは違う教育課程・シラバスであることを意識して学習指導を行った」と答えている教員がほとんどであるが、様々な進路希望を持つ生徒の実態に合わせるためにも、内容の精選・再配列や指導方法の効果・妥当性については、それぞれの教科において継続的な検討が必要である。
- (ウ) 研究開発に対する教員のかかわりの意識を高めるため、新着任者に対するオリエンテーションを実施したり、学校評価のPDCAサイクルを迅速に機能させたり、シラバスの見直しや前述の「Study Guide」の作成を各教科に依頼したり、「チューター会経営計画」の作成を各チューターに依頼したりした。また、研究開発に関する職員研修会を行い、全国の中等教育学校の特徴や、具体的な取組について研究した。これまで知らなかった他校の特色ある取組を知ったことで、本校が行っている特色ある取組の目的がはっきり見えたという感想が多く、多くの教員から聞かれた。6年間過ごした生徒がまだいない今の段階でも自信をもって取り

組めるよう、本校の一つ一つの取組が何を目的に行っているのか、他校とは何が違うのか、本校のめざすところがどこなのかを全教員にはっきり見える形にしていく必要がある。

- (オ) 生徒の学力をより客観的に把握するための資料として、後期課程は3～5回生で英語コミュニケーション能力テストを、前期課程全学年においては標準学力テスト（4月）、学力推移調査（11月）、英語検定（1月）を実施した。今年度は3回生対象に全国学力調査も行われ、これについても各教科で分析を行い、今後の指導方法の改善に向けての研究を行った。学力推移調査の結果については、外部講師を招いて教員研修会を開いた。その結果、「生徒の学力が客観的に把握でき、現在行っている教育活動の効果が見えてきた」という意見が増えた。

ウ 保護者等への効果

- (ア) 保護者対象に行ったアンケートでは、本校の教育に対する評価は概ね高かった。「チューター会というシステムは有意義である」84%、「少人数指導は学力の向上に役立つ」99%、「施設設備が充実している」95%、「教員は誠実に対応している」78%、「子供が入学してよかった」93%という回答が得られた。一方「ボランティア活動が盛んである」については55%と、他の項目に比べ低かった。生徒の歳末助け合い運動への参加者は120名にのぼるなど、生徒会の企画によるボランティア活動は年々盛んになっているが、まだ短期間実施のものに限定されている。今後は、年間を通じて行うボランティア活動を模索していく必要がある。

保護者の80%からの要望に「学力の向上」が挙げられている。本校の特色ある体験活動を充実させながらも、確かな学力を身に付けるために学習と体験活動のバランスのよい教育活動を展開していく必要がある。

- (イ) 学校開放として毎年行っている小学生対象の英会話教室、保護者及び彦島地区内住民対象のコンピュータ教室及び東アジア文化入門の三つの講座に、今年度は延べ51名の参加者があった。英会話教室については、今年度も彦島地区小学6年生に募集を行ったところ、11人の参加希望があった。新聞報道を通じて、下関市内からさらに6名の応募があり、17名で8回の教室を実施した。受講後のアンケートでは、「外国人の先生と話ができて、英語の楽しさがわかった」、「他の小学校の人とかかわれてよかった」というような感想がたくさんあり、受講者のうち多くが本校を志願した。大人対象の東アジア文化入門講座にも親子での参加を含む10名以上の参加があった。特に調理実習では、日本語に堪能な本校の韓国人・中国人講師の指導のもと、それぞれの国の料理を作り、その中で文化の違いを発見することができ、異文化理解が深まったと好評であった。また、今年度も小学生と保護者を対象にした学校公開を実施した。計4回行ったところ、延べ500人を超える参観者があった。

- (ウ) 本校の保護者は、学校の取組について大変関心をもっており、学年行事等に前期課程ではほとんどの保護者が、後期課程でも高い割合で来校している。「PTA総会、授業参観日、保護者会など、学校との連携を深める機会に参加したいと思われませんか」という問いに対して、88%の保護者から、「そうしたい」という回答があった。学校祭、体育大会、合唱コンクール等の学校行事をはじめ、PTA主催の研修会、進路講演会、国際理解に関する講演会、芸術鑑賞会などにも多数の保護者が自主的に参加している。これは、本校の教育活動に

対する関心の高さの表れであるが、生徒の実際の活動を見ることで、本校の取組に対する理解はより確かなものになっている。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

- ① 教育課程やチューター制などについて、よりよいものをめざして毎年改善を重ねてきたが、小学校から入学してきた生徒がまだ卒業していないため、先を見通した取組ができない、今やっている活動が効果的なものなのかどうか確信が持てないという声が未だにある。また、ホームページや学校新聞等を通して、小学校をはじめとする様々な方面に広報活動を行ってきたものの、本校の特色ある取組が県民レベルにまで十分に浸透しているとはいえない。この状況を打開するためにも、これまで4年間継続して行ってきた教育活動についての検証と新たなアイデアを模索するとともに、教育目標である「確かな学力と豊かな人間性を育む」を達成するために、教員集団が自信をもって教育活動に取り組める体制作りが必要である。また、可能な範囲でこれまでとは別の方法を試し、これまでやってきた方法との比較や分析を重ねながら、最終的に理想だと思われる形が見付けられるようにしていきたい。そして、「中等教育学校」の特性や、「本校の特色ある取組」が広く県民に浸透するようにしていきたい。
- ② 開校時に入学した生徒が基礎・基本期から充実・発展期へと進むにあたり、教育課程・教科指導の継続性と切り替えの問題、授業の難易度やスピードなど、生徒の実態に合わせた進め方を研究していく必要がある。中学校出身の教員と高等学校出身の教員のそれぞれの経験や考えを生かした研修会や、先進校の事例研究等により、適切な対応と効果ある指導を継続していく必要がある。
- ③ 学校のwebページや広報活動を充実させたことや、教育課程の説明に「Study Guide」を活用したことで、保護者や教員の研究開発に対する理解は昨年度と比べても深まっている。しかし、各教科や特色ある取組の詳細については、担当した教員は熟知しているものの、全教員が深く知るところまでは至っていないため、教員研修会や、教員同士の意見交換を重ねる必要がある。機会をとらえて教員同士による説明会や研修を繰り返すことで、6年間の中高一貫教育という新たな学校システムの周知徹底を図っていく必要がある。生徒・保護者に対しては、学校に足を運んでもらう機会を増やすとともに、ホームページや学校通信「飛翔」等を十分に活用しながら、本校独自の教育課程や取組について周知徹底していく。
- ④ 本校のめざすところであり、保護者の期待するところでもある「豊かな人間性の育成」「個性の伸長」の実現のために、本校の特色ある様々な取組が、何を目指して行われているのか、どこに生かされているのか等をはっきりさせる必要がある。道徳や特別活動についても、6年間の一貫した指導方針を作成するとともに、ゆとりと継続性や地域性を生かした具体的方策を研究していく必要がある。

山口県立下関中等教育学校 平成19年度入学生の6年間の教育課程表

別紙1

教科等	学年 学級数			教科・科目等	共通 学級数		
	1	2	3		4	5	6
国語	158 (+18)	140 (+35)	140 (+35)	国語表現Ⅰ		2	
				国語表現Ⅱ			2
				現代文		2	→ 2
				古典		2	→ 2
				古典講読		2	→ 2
				※国語Z	5		
社会	123 (+18)	123 (+18)	158 (+73)	世界史B		△3	→ 2
				日本史B		●4	→ 2
				地理B		●4	→ 2
				※地域の歴史と地理			2
				※日本の歴史と地理			2
				倫理		2	
				政治・経済			2
数学	140 (+35)	140 (+35)	140 (+35)	数学Ⅱ		5	
				数学Ⅲ			4
				数学A			2
				数学B		2	→ 2
				数学C		2	→ 2
				※数学Z	5		
理科	140 (+35)	140 (+35)	123 (+43)	物理Ⅰ		▲3	→ 4
				物理Ⅱ			→ 4
				化学Ⅰ		△3	→ 2
				化学Ⅱ		▲3	→ 4
				生物Ⅰ		△3	→ 2
				生物Ⅱ		▲3	→ 4
				地学Ⅰ		△3	→ 2
				※理科Z	4		
				※発展物理			2
				※発展化学			2
				※発展生物			2
音楽	52 (+7)	52 (+17)	52 (+17)	音楽Ⅰ	◇2		
美術	52 (+7)	52 (+17)	52 (+17)	美術Ⅰ	◇2		
				書道Ⅰ	◇2		
				※アンサンブル		2	
				※音楽表現			2
				※美術表現		2	
				※絵画・平面構成			2
				※フリーアート			2
				※書道表現		2	
				※篆刻・刻字			2
保健体育	105 (+15)	105 (+15)	105 (+15)	体育	3	2	2
				保健	1	1	
技術・家庭	35	35	35	英語Ⅱ		4	
				リーディング			4
				ライティング		○2	→ 2
				※英語Z	4		
				※英会話	2		
				※ハングルⅠ	◆1	→ 1	
				※ハングルⅡ			→ 1
				※ハングルⅢ			→ 1
				※中国語Ⅰ	◆1	→ 1	
				※中国語Ⅱ			→ 1
				※中国語Ⅲ			→ 1
				※英語実践Ⅰ		○2	→ 2
				※英語実践Ⅱ			→ 2
				※応用英語		2	
				※発展コミュニケーション			2
				※発展ハングル			2
				※発展中国語			2
選択教科	※情報技術	35	35	家庭	家庭基礎	2	
	※英会話	35	35	情報	情報A	1	
	※書道		35	家庭	児童文化		2
					食文化		2
					被服製作	2	
総合的な学習の時間	海峽学	35	35	体育	スポーツⅠ	2	2
	東アジア文化入門	35	35		スポーツⅡ		2
	道徳	35	35	英語	異文化理解		2
	学級活動	35	35	社会	※社会Z	3	
	授業時数計	1120	1120		総合的な学習の時間	1	1
			1190		ホームルーム活動	1	1
					単位数合計	35	35

《注》・※は学校設定教科・科目を示す。
 ・前期課程の道徳（35時間）はチューター会にて実施する。
 ・※英会話において少人数指導を実施する。
 ・3回生「国語」の「書写」は学校設定教科「書道」で行う。
 ・3回生の「情報技術」（35時間）を履修したことによって、「情報A」1単位分を履修したものとす。
 ・後期課程においては単位制を採用する。
 ・「国語総合」(4)、「現代社会」(2)「世界史A」(2)、「数学Ⅰ」(3)「数学A」(2)、「理科総合A」(2)「理科総合B」(2)、「英語Ⅰ」(3)は、「国語Z」「社会Z」「数学Z」「理科Z」「英語Z」で、それぞれ行う。

・▲から2科目または△から2科目選択する。
 ・同記号◇●○の科目から1科目選択する。
 ・→ は継続履修を表す。
 ・----- は必ずしも継続履修する必要はない。
 ・数学Cを選択したものは6回生で、数学Aを選択することはできない。
 ・「Ⅱを付した科目」は「Ⅰを付した科目」の履修後とする。（ただし、国語表現はその限りではない。）
 ・5回生、6回生では単位数合計が35になるように網掛けの科目から選択し履修する。

別紙2

学校等の概要

1 学校名、校長名

やまぐちけんりつしものせきちゅうとうきょういくがっこう
山口県立下関中等教育学校 校長 永富 康文

2 所在地、電話番号、FAX番号

山口県下関市彦島老町2丁目21番1号

TEL：083—266—4100

FAX：083—266—5501

3 学年・課程・学科別生徒数、学級数（平成19年12月1日現在）

課程	学科	1回生		2回生		3回生		4回生		5回生		6回生		計	
		生徒数	学級数												
全日制	普通科	120	3	118	3	113	3	120	3	116	3	111	3	698	18

4 教職員数（平成19年12月1日現在）

校長	教頭	教諭	養護教諭	非常勤講師	実習助手	ALT	スクールカウンセラー	事務職員	栄養職員	校務技士	司書	計
1	2	51	2	8	1	2	2	5	1	1	0	76

I 学校の概要

本校は、平成16年4月、山口県立下関第一高等学校からの移行という形で、校舎全面建て替えによって開校し、今年度4年目となる山口県唯一の中等教育学校である。本州の西端、下関市彦島にある老の山の山腹にあり、校舎からは関門海峡（瀬戸内海）と響灘（日本海）を見下ろすことができる。

1学年の定員は120名であり、後期課程は単位制普通科である。

今年度、小学校から入学してきた第1期生が後期課程に進級し、4回生となった。5、6回生は、後期課程から編入学試験を経て入学してきた生徒である。

1 沿革

平成10(1998)年	5月	山口県立下関第一高等学校を文部省「中高一貫教育に係る実践研究事業」実践協力校に指定（平成10～11年度）
平成11(1999)年	9月27日	山口県教育委員会が、平成16年4月をめどに下関第一高等学校を現地建て替えにより中等教育学校に移行するとの方針を表明
平成12(2000)年	4月	山口県立下関第一高等学校を文部科学省「中高一貫教育に係る実践研究事業」中高一貫教育推進校に指定（平成12～15年度）
平成15(2003)年	11月1日	山口県立下関中等教育学校を設置 初代校長 町田政勝 就任
平成16(2004)年	4月1日	山口県立下関中等教育学校開校
平成16(2004)年	4月1日	文部科学省研究開発学校指定（平成16～18年度）
平成18(2006)年	3月31日	山口県立下関第一高等学校閉校
平成18(2006)年	4月1日	2代校長 永富康文 就任
平成19(2007)年	4月1日	文部科学省研究開発学校指定延長（平成19～21年度）

2 学年・課程・学科別生徒数、学級数（平成19年12月1日現在）

課程	学科	1回生		2回生		3回生		4回生		5回生		6回生		計	
		生徒数	学級数												
全日制	普通科	120	3	118	3	113	3	120	3	116	3	111	3	698	18

3 教職員数

校長	教頭	教諭	養護教諭	非常勤講師	実習助手	ALT	スクールカウンセラー	事務職員	栄養職員	校務技士	司書	計
1	2	51	2	8	1	2	2	5	1	1	0	76

4 コンセプト（教育理念）

（1）下関中等教育学校設立のコンセプト・教育目標

＜学校設立のコンセプト＞ 地域の特性を生かし、国際化の進展に対応した学校づくり

＜教育目標＞ ゆとりの中で生きる力を育み、誇りと自信をもって世界に飛躍する人材の育成

（2）コンセプトを具現化する学校づくり

次に示す「学校づくりのための4つの視点」「4つの特色ある教育システム」により、豊かな人

間性と確かな学力を育み、生徒一人ひとりの希望進路の実現を支援していく。

○ 学校づくりのための4つの視点

中等教育学校を「可能性を大きく伸ばすゆとりと充実の6年間」と位置付け、

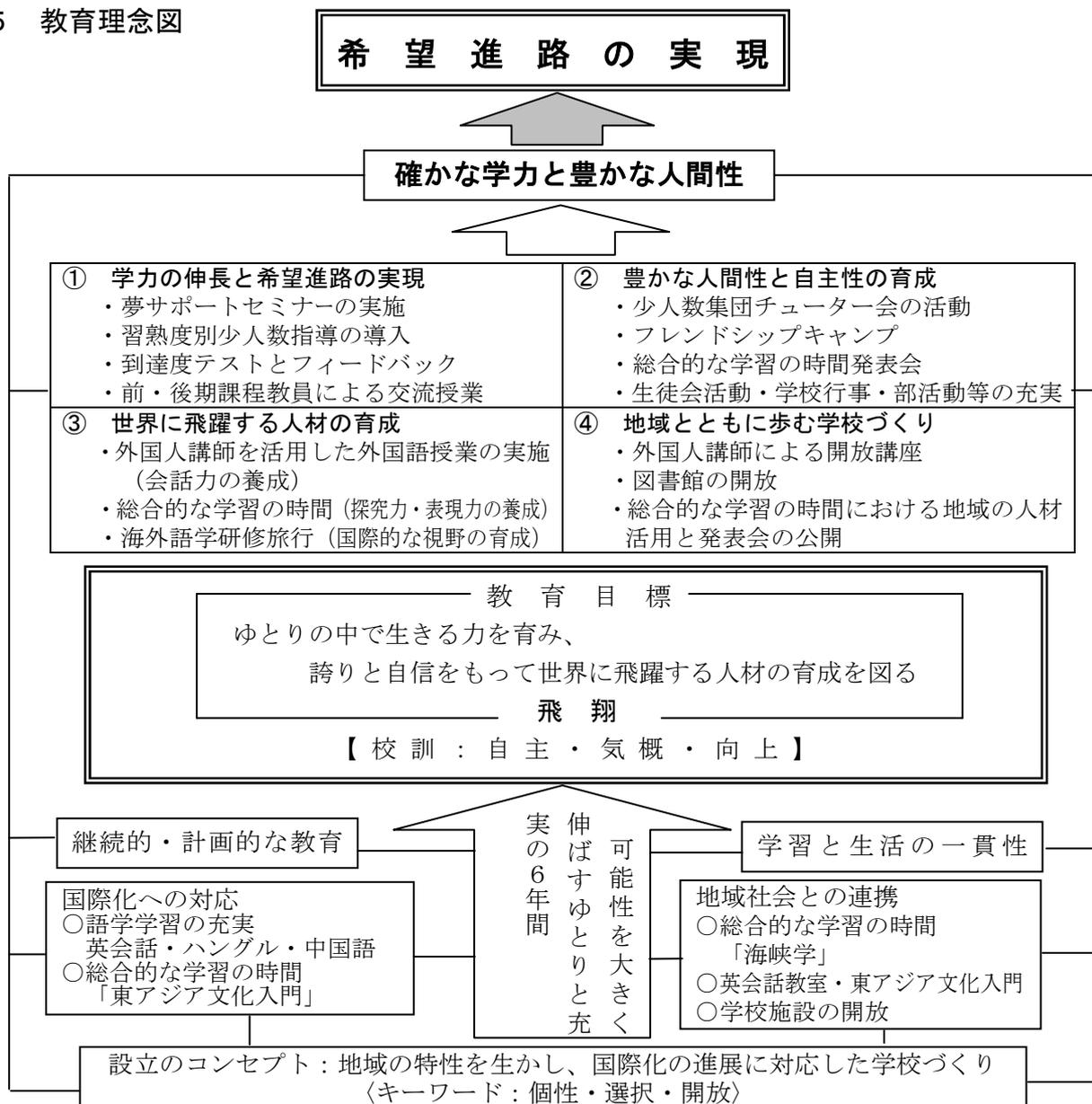
- ① 中高一貫教育の特色を生かして展開する「継続的・計画的な教育」
- ② 地域の特性を生かした「国際化への対応」
- ③ 「学習と生活の一貫性」による生きる力の育成
- ④ 地域の人々と生徒がともに学び合う「地域社会との連携」

を視点とした学校づくりを推進する。

○ コンセプトを具現化する特色ある教育システム

- ① 学力を大きく伸ばし、希望進路の実現を支援する6年一貫の効果的な教育課程
- ② 世界に飛躍する人材を育成する語学教育
- ③ 豊かな人間性と自主性を育むチューター会・自主活動
- ④ 地域とともに歩む双方向の学校開放

5 教育理念図



Ⅱ 研究開発の概要

1 研究開発課題

中等教育学校の特性を生かし、確かな学力と豊かな人間性を育むための一貫性、継続性のある効果的な教育課程及び指導方法の研究開発

本校は、学校設立のコンセプトを「地域の特性を生かし、国際化の進展に対応した学校づくり」とし、そのコンセプトに沿って、教育目標を「ゆとりの中で生きる力を育み、誇りと自信をもって世界に飛躍する人材の育成」と定めている。その目標を達成するためには、単なる中学校プラス高等学校としての6年間ではなく、中等教育学校としての特性を最大限に生かした6年一貫の効果的な教育課程を編成し、学習指導を行うことによって、確かな学力を育むとともに、教科学習以外の諸活動や人とのかかわりを通して広い視野や豊かな人間性を育んでいく必要があると考え、この課題を設定した。

2 研究の概要

生徒が一つの学校で6年間を過ごすという中等教育学校の特性を生かし、次の二つの方法等について研究開発を行う。

- 前・後期課程を一体的にとらえた効果的な教育課程及び教科等の指導方法
 - 幅広い年齢層の生徒が共に生活し、学び合う中で豊かな人間性を育む諸活動の工夫
- 具体的には、①1回生から4回生までを「基礎・基本」期、5・6回生を「充実・発展」期と位置付け、中学校・高等学校の学習内容を精選・再配列した教育課程・教科指導及びそれを生かすための適切なガイダンス、②6年間を見通した『総合的な学習の時間』（下関や周辺地域を多面的に研究する「海峡学」、韓国・中国の文化や言語について学ぶ「東アジア文化入門」）の内容・実施方法、③授業クラスとは別の少人数集団である「チューター会」で行う諸活動、④上級生が下級生の授業において教員をサポートする「リトル・ティーチャー制」等について研究していく。

3 研究仮説

本校は、本県における最初の中教育学校であり、次のような特性がある。

- ・ 生徒が一つの学校で6年間を過ごすため、6年間を見通した継続的な学習指導、進路指導、生活指導等を行うことができる。
- ・ 1回生から6回生まで、成長・変化の著しい時期に幅広い年齢層の生徒たちが共に学校生活を送ることになる。
- ・ 本校の所在地である下関は本州の最西端に位置し、古くから海外との交流の玄関口として重要な役割を果たしてきた。特に東アジア諸国とのかかわりは深く、現在も文化的、経済的交流が盛んである。

これらの中等教育学校としての特性や地域的特性を最大限に生かした教科指導・進路指導・生活指導等を行うことによって、確かな学力と豊かな人間性をもち、同時にコミュニケーション能力、自己表現力を身に付け、世界に飛躍する人材を育成することが

できると考える。

研究開発の中心となるのは、次のようなものである。

○ 中等教育学校の特性を生かす教育方法の開発

- ・ 6年間を見通した教育課程・教科指導
- ・ チューター制
- ・ リトル・ティーチャー制

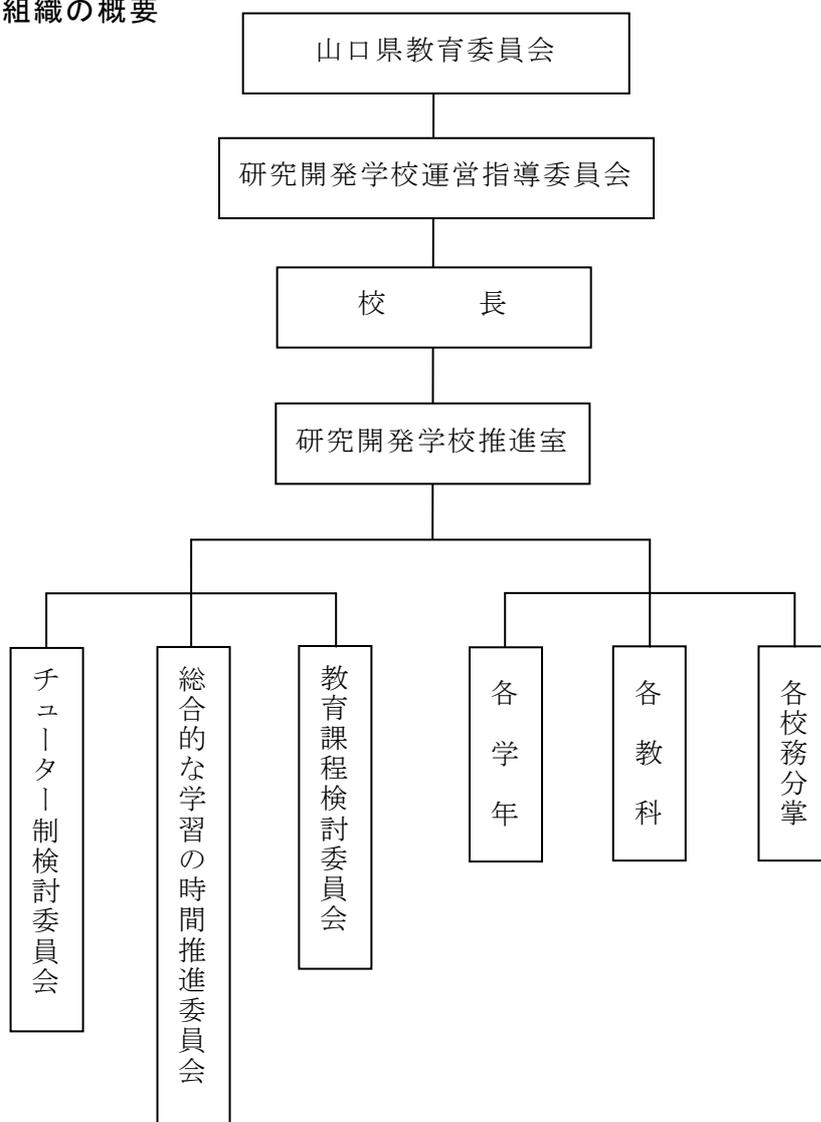
○ 下関の地域的特性を生かす教育方法の開発

- ・ 総合的な学習の時間としての「海峡学」「東アジア文化入門」
- ・ 語学教育、コミュニケーション能力・表現力の育成

これらの取組についての具体的な内容は、「Ⅳ 研究開発の内容」に記す。

4 研究組織

(1) 研究組織の概要



(2) 研究担当者 (○印は研究主任)

職 名	氏 名	担当学年及び教科
教 諭	○ 相 田 康 弘	4 回生、数学科
教 諭	工 藤 優 子	1 回生、国語科
教 諭	原 本 悦 美	5 回生、外国語科
教 諭	吉 田 紘 子	2 回生、外国語科
教 諭	栗 林 和 弘	4 回生、外国語科

(3) 運営指導委員会

氏 名	所 属	職 名
岩 野 雅 子	山口県立大学	教 授
柳 瀬 陽 介	広島大学	准教授
波佐間 清	下関市教育委員会	教育次長
中 村 喜久男	下関市立文関小学校	校 長
前 田 登	前田海産株式会社	会 長
呉 香 善	立命館アジア太平洋大学	講 師
千代田 三智子	山口県立下関中等教育学校	P T A 会長
三 吉 英 太	山口県教育庁高校教育課	課 長

<事務局>

松 田 和 寛	山口県教育庁義務教育課	指導主事
国 清 賢 一	山口県教育庁高校教育課	管理主事
藤 村 慎一郎	山口県教育庁高校教育課	指導主事

Ⅲ 研究開発の経緯

平成19年

- 4 / 6 研究開発についての説明（職員会議）
- 4 / 14 P T A総会で保護者に対し研究開発についての説明
- 4 / 16 研究開発についての説明（新着任者オリエンテーション）
- 5 / 8 教育課程検討委員会①
- 5 / 16 総合的な学習の時間推進委員会①
- 5 / 17 チューター制検討委員会①
- 5 / 18 教育課程検討委員会②
- 7 / 9 研究開発学校第1回運営指導委員会
- 8 / 3 教員校内研修会①
- 9 / 22 学校説明会（小学生向け）にて本校の取組についての説明
- 9 / 26 研究開発・学校評価アンケート
- 10 / 16 平成19年度全国高校教育改革研究協議会（東京）に出席
- 10 / 17 入学者選抜説明会（小学校教員対象）
- 10 / 19 入学者選抜説明会（児童・保護者対象）
- 11 / 2 全国中高一貫教育研究大会（東京）に出席
- 11 / 15 学校評議委員会①
- 11 / 19 研究開発学校第2回運営指導委員会
- 11 / 27 教員校内研修会②

平成20年

- 1 / 20 平成19年度前期課程入学者選抜選考検査実施
- 2 / 18 総合的な学習の時間推進委員会②
- 2 / 20 研究開発学校研究協議会（東京）に出席
- 2 / 20 研究開発学校第3回運営指導委員会
- 2 / 20 東京大学教育学部附属中等教育学校研究発表会に出席
- 2 / 29 チューター会に関するアンケート
- 3 / 4 チューター制検討委員会②

IV 研究開発の内容

1 教育課程

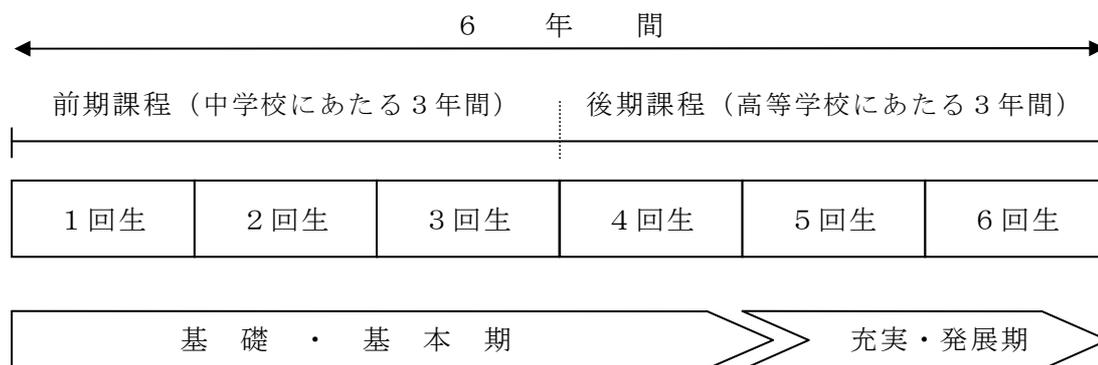
(1) 教育課程・教科指導について

6年間の中等教育を一つのスパンにとらえ、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成を基本として、1回生から4回生までを「基礎・基本」期、5・6回生を「充実・発展」期と位置付ける。「基礎・基本」期においては、各教科の中学校・高等学校の学習内容で基礎・基本と考えられるものを精選・再配列し、内容の重複を避けるとともに有機的な結合を図り、発展的な学習の土台となる基礎学力の確実な定着を図る。

また、前期課程から後期課程への円滑な接続によって生じるゆとりを生かした指導により、つまずきの解消を図るとともに、学力差が拡大すると考えられる3回生からは習熟度別授業を取り入れ、一人ひとりの生徒の実態に即した指導を行う。

「充実・発展」期においては、その土台の上に立ち、それぞれの興味・関心や進路希望に応じて各自が自分に適した科目を学ぶことができるよう、幅広い選択科目を準備する。また、その効果を上げるため、後期課程においては単位制を導入する。

[6年間の流れ]



(2) 必要となる教育課程の特例

各教科とも効果的な学習を進めるために、「基礎・基本」期である1回生から4回生までを継続した一体的な教科として内容を精選・再配列し、この間に国語・数学・理科・英語については、高等学校の必修科目の学習を終えることとする。

そのために

- ① 前期課程においては、国語・社会・数学・理科の授業時数が各学年バランスよく増加し、選択教科としてではなく、増時数した必修教科として全員が学習する。
- ② ①により、3回生の前半までに中学校の学習内容はほぼ終了し、3回生後半からは高等学校の学習内容を取り入れる。
- ③ 4回生では、前期課程との連続性を確保するため、学校設定科目「国語Z」「社会Z」「数学Z」「理科Z」「英語Z」を履修することとし、それぞれ国語総合、現代社

会及び世界史A、数学I及び数学A、理科総合A及び理科総合B、英語Iを代替するものとする。

- ④ 1回生から4回生の学習内容については、学習指導要領に定められた内容・順序とは一部変更し、内容の効果的な精選、再配列を行う。

「基礎・基本」期における各教科の増時数や、特別に設定する教科・科目及びその扱いは次のとおりである。

[前期課程]

国語・社会・数学・理科・英語の各教科の年間授業時数

	国語	社会	数学	理科	外国語(英語)
1回生	158 (+18)	123 (+18)	140 (+35)	140 (+35)	105 (+英会話として35)
2回生	140 (+35)	123 (+18)	140 (+35)	140 (+35)	123 (+18) (+英会話として35)
3回生	140 (+35) (書写を除く)	158 (+73)	140 (+35)	123 (+43)	140 (+35) (+英会話として35)

※ () 内は、学校教育法施行規則に示された時数との比較

- ・ 教育課程表上の総授業時数を1,120単位時間とする。
- ・ 1～3回生において、選択教科「情報技術」を設定する。「情報技術」は、1・2回生の「技術・家庭」の35時間ずつを代替するものとし、3回生での実施分は、後期課程における選択必修科目「情報A」の1単位分を代替するものとする。
- ・ 1～3回生において、選択教科「英会話」を設定する。
- ・ 3回生において、選択教科「書道」を設定する。3回生の「国語」の「書写」は、この「書道」によって代替する。

[後期課程]

4回生において、前期課程との連続性を確保するため、次の学校設定科目を設け、必修科目を代替する。

「国語Z」(5単位) … 「国語総合」(4単位) を代替する。

「社会Z」(3単位) … 「現代社会」(2単位)・「世界史A」(2単位) を代替する。

「数学Z」(5単位) … 「数学I」(3単位)・「数学A」(2単位) を代替する。

「理科Z」(4単位) … 「理科総合A」(2単位)・「理科総合B」(2単位) を代替する。

「英語Z」(4単位) … 「英語I」(3単位) を代替する。

(3) - ① 平成19年度教育課程表

学年 学級数	1			2			3		
	3			3			3		
必修教科	国語	158 (+18)	140 (+35)	140 (+35)	国語表現Ⅰ		2		
	社会	123 (+18)	123 (+18)	158 (+73)	国語表現Ⅱ				2
					現代文			2	3
					古典			2	2
					古典購読			2	2
					※国語Z	5			
	地理歴史				世界史B				4
					日本史B			▲4	2
					地理B(4)			▲4	4
					地理B(2)				2
					※地域の歴史			2	
	公民				※地理歴史研究				2
					現代社会			2	
					倫理				2
数学	140 (+35)	140 (+35)	140 (+35)	政治・経済				2	
				数学Ⅱ(5)			★5		
				数学Ⅱ(3)			★3		
				数学Ⅱ(2)				2	
				数学Ⅲ				4	
				数学A				2	
				数学B			2	2	
				数学C				2	
理科	140 (+35)	140 (+35)	123 (+43)	※数学Z	5				
				理科総合B				2	
				物理Ⅰ			◆3		
				物理Ⅱ				4	
				化学Ⅰ(3)			◆3		
				化学Ⅰ(2)			●2		
				化学Ⅱ				4	
				生物Ⅰ(3)			◆3		
				生物Ⅰ(2)			●2	2	
				生物Ⅱ				4	
芸術	52 (+7)	52 (+17)	52 (+17)	地学Ⅰ			●2	2	
				※理科Z	4				
				音楽Ⅰ	◇2				
				音楽Ⅱ			2		
				美術Ⅰ	◇2				
				美術Ⅱ			2		
				書道Ⅰ	◇2				
				書道Ⅱ			2		
保健体育	105 (+15)	105 (+15)	105 (+15)	※篆刻・刻字				2	
				体育	3		3	2	
				保健	1		1		
外国語	105	123 (+18)	140 (+35)	※体育実践				2	
				オーラル・コミュニケーションⅡ			2		
				英語Ⅱ			4		
				リーディング				4	
				ライティング			2	2	
				※英語Z	4				
				※英会話	2				
				※ハングルⅠ	○1		2	2	
				※ハングルⅡ				2	
				※中国語Ⅰ	○1		2	2	
※中国語Ⅱ				2					
選択教科	35	35	35	家庭基礎	2				
				家庭			※世界の食文化	2	
				情報A	1				
総合的な学習の時間	35	35	35	情報C				2	
				家庭			児童文化	2	
				美術			素描	2	
				英語			異文化理解	2	
学校設定教科	35	35	35	時事英語				2	
				社会			※社会Z	3	
道徳	35	35	35	総合的な学習の時間	1		1	1	
学級活動	35	35	35	ホームルーム	1		1	1	
授業時数計	1120	1120	1190	単位数合計	35		35	35	

《注》・2学期制、45分授業を実施する。

・後期課程の4, 5, 6年生においては単位制を採用する。

・※は学校設定教科・科目を示す。

・前期課程の道徳(35時間)はチューター会にて実施する。

・1, 2, 3, 4年生の※英会話、2, 3年生の数学、3年生の外国語、4年生の数学Z、英語Z、5年生の英語Ⅱにおいて少人数指導を実施する。

○◇▲★: 同記号の科目から1科目選択する。

◆●: 同記号の科目から2科目選択する。

・5, 6年生では単位数合計が35になるように網掛けの科目から選択し、履修する。

・4年生の情報A、6年生の情報Cにおいてティーム・ティーチングを実施する。

(3) - ② 平成19年度入学生の6年間の教育課程表

学年 学級数	1			2			3			類型 学年 学級数	共通		
	3	3	3	3	3	3	3	3	3		3	3	
必修教科	国語	158 (+18)	140 (+35)	140 (+35)	国語表現Ⅰ			2					
					国語表現Ⅱ				2				
					現代文				2	→		2	
					古典				2	→		2	
					古典講読				2	→		2	
					※国語Z			5					
					世界史B				△3	→		2	
					日本史B				●4	→		2	
					地理B				●4	→		2	
					※地域 of 歴史と地理							2	
					※日本の歴史と地理							2	
					倫理				2				
					政治・経済							2	
					数学Ⅱ				5				
					数学Ⅲ							4	
				数学A							2		
				数学B				2	→		2		
				数学C				2	→		2		
				※数学Z			5						
				物理Ⅰ					▲3	→	4		
				物理Ⅱ							4		
				化学Ⅰ					△3	→	2		
				化学Ⅱ					▲3	→	4		
				生物Ⅰ					△3	→	2		
				生物Ⅱ					▲3	→	4		
				生物Ⅲ							4		
				地学Ⅰ					△3	→	2		
				※理科Z			4						
				※発展物理							2		
				※発展化学							2		
				※発展生物							2		
				音楽Ⅰ				◇2					
				美術Ⅰ				◇2					
				書道Ⅰ				◇2					
				※アンサンブル				2					
				※音楽表現							2		
				※美術表現				2					
				※絵画・平面構成							2		
				※フリーアート							2		
				※書道表現				2					
				※篆刻・刻字							2		
				体育				3			2		
				保健				1			1		
				英語Ⅱ					4				
				リーディング							4		
				ライティング					○2	→	2		
				※英語Z			4						
				※英会話			2						
				※ハンブルⅠ			◆1	→			1		
				※ハンブルⅡ							1		
				※ハンブルⅢ							1		
				※中国語Ⅰ			◆1	→			1		
				※中国語Ⅱ							1		
				※中国語Ⅲ							1		
				※英語実践Ⅰ					○2	→	2		
				※英語実践Ⅱ							2		
				※応用英語				2					
				※発展コミュニケーション							2		
				※発展ハンブル							2		
				※発展中国語							2		
				家庭基礎				2					
				情報A				1					
				児童文化							2		
				食文化							2		
				被服製作				2					
				スポーツⅠ					2		2		
				スポーツⅡ					2		2		
				異文化理解							2		
				※社会Z			3						
				総合的な学習の時間				1		1	1		
				ホームルーム活動				1		1	1		
				授業時数計	1120	1120	1190	35	35	35	35		

《注》・※は学校設定教科・科目を示す。
 ・前期課程の道徳（35時間）はチューター会にて実施する。
 ・※英会話において少人数指導を実施する。
 ・3年生「国語」の「書写」は学校設定教科「書道」で行う。
 ・3年生の「情報技術」（35時間）を履修したことによって、「情報A」1単位分を履修したものとす。
 ・後期課程においては単位制を採用する。
 ・「国語総合」(4)、「現代社会」(2)「世界史A」(2)、「数学Ⅰ」(3)「数学A」(2)、「理科総合A」(2)「理科総合B」(2)、「英語Ⅰ」(3)は、「国語Z」「社会Z」「数学Z」「理科Z」「英語Z」で、それぞれ行う。

・▲から2科目または△から2科目選択する。
 ・同記号○◆●○の科目から1科目選択する。
 ・→ は継続履修を表す。
 ・----- は必ずしも継続履修する必要はない。
 ・数学Cを選択したものは6年生で、数学Aを選択することはできない。
 ・「Ⅱを付した科目」は「Ⅰを付した科目」の履修後とする。（ただし、国語表現はその限りではない。）
 ・5年生、6年生では単位数合計が35になるように網掛けの科目から選択し履修する。

(4) 教育課程の効果と課題

本校では、中等教育学校の特性を生かした6年間を見通した教育課程を編成しているが、その大きな特徴は、6年間の4年間の「基礎・基本期」プラス2年間の「充実・発展期」としていることである。研究開発4年次を迎え、今年度、第1期生が「基礎・基本期」を終了した。

そこで、今年度前期課程との連続性を確保するため実施した「Z科目（国・社・数・理・英）」の成果と課題について述べたい。

国語Z

(ア) 4回生Z科目の特徴・6年間の流れの中での位置付け

基礎・基本期最終学年としての総合的な力を育てることを目標とする。特に古典分野に5単位のうちの3単位を充て、自分の力で読解できるようになるための基礎的な力を養うことに重点を置く。そのため、作品を時代で配列し、文法の基本事項、文学史、古典常識等全体的に網羅できるようにする。また、3回生と4回生の古典で重複する学習内容を精選し、3回生で高校古典の入門を行い、4回生ではさらに進んだ学習ができるようにする。

(イ) 成果と課題

古典分野に3単位充てたことで、古文・漢文とも、読解に必要な基本事項の学習に時間をかけることができた。来年度は再度指導内容や指導方法等を検討し、基本事項のさらなる定着をめざしていきたい。

社会Z

(ア) 4回生Z科目の特徴・6年間の流れの中での位置付け

3回生の社会で、公民の教科書を用いてまず基礎・基本的内容を押さえ、同じ分野の発展的内容として「現代社会」を学習する。現代世界における様々な諸問題の歴史的背景等を確認し、解決の方向を見いだすためには、近現代を中心とした「世界史A」の学習が不可欠である。「社会Z」は、現代社会における諸問題を分析的かつ体系的に学習することを目標として、近現代を中心にそれらが発生してきた歴史的過程についての理解を深めさせる科目である。

(イ) 成果と課題

「世界史A」は、近現代を中心とした世界史の大きな流れを理解させていく科目であり、現代の諸問題が発生してきた歴史的背景を学習するには極めて有効であった。単に過去の史実を学習するのではなく、現代の諸問題と関連付けて学習した方が生徒の興味・関心も高まり、理解も深まる。問題意識をもって、自ら主体的に学習しようとする意欲も高まってくる。その意味で、「社会Z」の学習は、世界史とともに現代社会の学習目的も充足することとなり、しかも両者を有機的に関連付けて考察するものとすることも可能とした。

課題としては、学習が「過去と現在の対話」ではなく、時として単なる歴史学習になってしまった点があげられる。今後は「世界史A」の学習内容をさらに精選して、現代につながる世界史を分析的に探究する授業づくりをする必要がある。

数学Z

(ア) 4回生Z科目の特徴・6年間の流れの中での位置付け

前期課程とのなめらかな接続を図るため、学校設定科目「数学Z」を設定し、「数学I」「数学A」を代替するものとする。基礎・基本期のまとめの科目として位置付けるとともに、高校数学の土台とする。

(イ) 成果と課題

3回生から習熟度によりマスター・スタンダード・ベーシックの3コースに分かれているため、指導内容やテスト問題をそれぞれのコースで工夫することで生徒の競争心を促し、学習意欲を高めている。また、3回生の内容と重複する部分については復習として指導できる。一方、各コースとも同じ教科書を使用しているため、一部の生徒には、教科書のレベルが、自分の習熟度に合っていないと感じている生徒もいる。また、理系の生徒や数学の得意な生徒にとっては、本来2科目あるものが1科目として評価されるため、評定平均への反映の観点からは、デメリットとなる者が出てくる。今年度は、週5時間の授業を2人の教員で担当しているが、6年間の流れと科目間のつながりを意識して指導を行うためにも、1人の教員で指導するという方法も考えられる。これら教員の配置、あるいは指導内容や指導順序などについては再検討する必要がある。

理科Z

(ア) 4回生Z科目の特徴・6年間の流れの中での位置付け

本校では、1～3回生の中学校理科の教科書をベースに学習を進めており、その中で各単元に関連した高等学校の「理科総合A」および「理科総合B」の学習内容を発展的に取り扱うことにしている。3回生までに両科目のうち、生物領域・地学領域の大部分、物理領域・化学領域のおよそ半分が終了することになる。4回生では、基礎・基本期の総括として、「理科Z」を設定し、主に物理領域・化学領域の学習を進めるとともに、生態系や環境問題についての理解を深める学習を行う。また、課題研究として、少人数の研究グループによる研究テーマの設定、実験・観察を通じた探究活動を行った。

(イ) 成果と課題

「理科総合A」と「理科総合B」の学習内容のうち、3回生までに取り扱えない部分を指導内容としているが、基礎・基本期の総括として、中学校理科の学習内容とも関連付けて、総復習として学習を進めることができた。特に、化学領域について、2回生における学習での理解が十分ではない生徒も多く、繰り返し学習により内容の定着に寄与することができたと考えられる。環境に関する内容は、「理科総合A」と「理科総合B」それぞれで取り扱うが、両方の内容を並行して行うことができ、複数の観点から環境問題をとらえる学習を進めることができた。通常の授業においては、6年間の流れを意識して多角的なものを見方をしながらの授業を展開したとはいえ、理科Zの特徴を十分に生かすことはできなかった。授業の展開に工夫を持たせる必要がある。

また、課題研究（→3（2）理科課題研究）では、生徒の課題設定の在り方や、教

員の配置、設備面などに多くの課題を残すこととなった。今後は、前期課程から、この段階での課題研究の実施を見越した学習の進めかたについて、考えていく必要があるだろう。

英語 Z

(ア) 4 回生 Z 科目の特徴・6 年間の流れの中での位置付け

3 回生で前期課程の「英語」の学習内容を終えた後、前期課程と後期課程の学習内容の連続性を確保するために「英語 I」の学習に入る。「英語 I」で取り扱う言語材料の中には、中学校の「英語」の言語材料と重複するものが多く、既習事項の確認をしながら連続性をもって高校の内容へ接続していくことは有用であると考えている。

また、「英語 Z」は 4 単位で設定しているので、4 回生の後半には「英語 I」の教科書を終えて「英語 II」の学習に入り、前半で既習の言語材料と相互に関連を持たせて発展的で幅広い話題を取り扱うこととしている。したがって、「英語 Z」では、前期課程の基礎の上に立ち、日常的なものから発展的なものまで、様々な話題について 4 技能の基礎的な能力を養い、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てている。

(イ) 成果と課題

前期課程の「英語」からブリッジ教材を経て、中学校と高等学校の学習内容のギャップを埋めながら「英語 Z」へと連続性をもって学習してきたので、同じ言語材料を基礎的レベルから発展的レベルのものまで何度も繰り返し学習することができると感じている生徒が多い。また、4 単位という設定により、多くの幅広い題材に触れることができ、英文を読み取る力も身に付いてきている。

また、英語 Z は習熟度別少人数授業の形態をとっているため、一人ひとりに目が行き届き、各コースの生徒のレベルに焦点を当てて授業を進めることができるというメリットもある。「発展コース」の生徒の意識や学力は高くなりつつあり、「標準コース」の生徒も授業中気軽に質問する雰囲気が出てきている。しかし、全ての生徒にとって意欲的な取組や学力の伸長に結び付いていないという課題も残されている。また、評価の点についても共通の内容で実施しているため、「発展コース」の生徒に有利になりがちであると感じている生徒もいる。今後、習熟度別という授業形態のことも含め、前期課程と後期課程のなめらかな接続のために、指導内容や評価の方法を一層工夫していく必要があると考えている。

2 生徒の学力についての考察

(1) 平成16年度入学生徒（現4回生）の学力分析

【全国模試による分析】

今年度、4回生全員が7月と11月に全国模試を受験した。昨年度の4回生は、高校入試を経て入学した生徒であったため、ある程度同レベルの学力であり、得点のばらつきは少なかった。しかし、今年度の4回生はそのばらつきがとても大きく、本校生徒の標準偏差は、全国のものに極めて近い大きな値を示している。大学の医学部・薬学部をめざす生徒もいれば、就職を希望する生徒もいる。生徒の進路に対する意識が多岐にわたっている中で120人の一斉指導を行っていくことの難しさを、今年度改めて感じる事となった。

標準偏差 (ばらつき)	全国模試		※ 一般的な普通 科高校の標準 偏差は 25～33
	7月	11月	
全国	44.7	48.5	
本校	40.2	45.4	
本校昨年度	20.7	27.0	

これまでも習熟度別授業を行い、それぞれの生徒の進路希望と学力レベルにあわせた指導を行ってきたが、この先もこの母集団が120人のまま変わらないことを考えると、学習に対する意識や取組の差が大きいことは、指導していくうえで気がかりなところである。この結果を受け、習熟度別授業のめざすところや実施方法について再検討するとともに、その他にも授業内外の多方面からこの問題に対する対策を考えていかなければならない。

(2) 前期課程生徒（現1～3回生）の学力分析

【学力推移調査による分析】

昨年度から実施している11月の学力推移調査では、2、3回生の平均点偏差値はいずれの教科も昨年度より上昇した(表2・表3)。特に成績下位層の生徒の偏差値が全般的に上昇し、偏差値50以上の生徒数が増加した。下位層が伸びたことで2、3回生の学年全体の度数分布のグラフのばらつきは少なくなり、団子状態を形成している。これは、各考査後、3回生においては接続テスト後に、計画的・継続的に補充授業を行ってきた成果であるといえる。後期課程での成長につなげていくためにも、4回生の基礎・基本期は、これまでの方針を継続し、基礎・基本の徹底をはかっている。

国・数・英の各教科においては、国語は全般的に、英語では「聞き取り」と「会話文」で、数学では「論証問題」の正答率が高いという結果が出ている。週1時間の英会話の授業、ALTの常駐、コミュニケーション能力の育成に力を入れている学校の方針、習熟度別少人数授業、2回生数学の α (数量分野)と β (図形分野)の並列授業、前期課程の授業時間数増などの本校の特色ある取組が、これらの成果につながっていると見える。

一方、2回生の英語は、昨年度に比べ「平均点偏差値」(表1)は上昇しているものの、「平均点」は4点減少している。3回生では、偏差値50以上であった生徒数が19人から14人に減少している(表3)。本校は英会話の時間を設けるなどして、一般の中学校より英語により多くの時間をかけて指導を行っているが、今回の学力推移調査では、読解力と英文作成での正答率がよくない。日常会話等の英会話は得意である反面、文法力、語彙力、長文読解力、作文力などの力がまだ十分身に付いておらず、本当の意味での英語コミュニケーション能力は、現時点では高まっているとは言えない。観点別評価の4つの項目について、バランス良く目標を達成させるために、時間をかけてじっくり取り組ませるような手だてが必要である。

<学力推移調査の結果より>

(表1)	今年度2回生			今年度3回生		
	平成18年度	平成19年度	差	平成18年度	平成19年度	差
平均点						
偏差値	1回生時	2回生		2回生時	3回生	
国語	40.3	43.2	2.9	45.2	48.2	3.0
数学	38.6	41.9	3.3	40.6	44.3	3.7
英語	42.3	43.8	1.5	42.6	43.9	1.3
合計	38.5	42.4	3.9	41.4	44.2	2.8

(表2) 現2回生	平成18年度	平成19年度	
偏差値50以上	1回生(昨年度)	2回生(今年度)	人数差
国語	15人	34人	+19人
数学	6人	12人	+6人
英語	19人	20人	+1人
合計	9人	16人	

(表3) 現3回生	平成18年度	平成19年度	
偏差値50以上	2回生(昨年度)	3回生(今年度)	人数差
国語	37人	48人	+11人
数学	15人	33人	+18人
英語	19人	14人	<u>-5人</u>
合計	14人	26人	
※ 英語偏差値40未満: 48人→32人			

学力推移調査において、本校の取組の成果は見られるものの、高校受験のない生活のため、一般の中学生よりも長い期間の「学習に対する中だるみ」が起こっているのは事実である。職場体験学習(2回生)やオープンキャンパスへの参加、進路講演会(3回生)などを通して、生徒の将来の進路に対する意識は徐々に高まっているが、これらと教科学習の指導とを並行して、自ら学習に取り組む姿勢を養っていきたい。

3 特色ある学習指導方法・内容

(1) 接続テストとその後の補充授業

ア 概要

高校入試がないことによる中だるみを防止し、今後の学習への意欲を持たせるきっかけにするとともに、中学校段階における基本的な学習内容を習得しているかどうかを確認することを目的として、昨年度から「接続テスト」という名称でテストを行っている。昨年度は1月に実施したが、事後指導が徹底しなかったことから、今年度は8月に実施した。

テストの結果は、4回生でのクラス編成等の資料とすることを予め生徒に伝え、とても重要な意味を持つテストであるという認識を持たせた上で準備に取り組みさせた。

このテストは国語・社会・数学・理科・英語の5教科で実施し、問題は本校の各教科内で作成したものを使った。テスト実施後、成績不振の生徒（各教科で基準を設ける）に対しては、部活動よりも優先して補充授業をうけることとし、保護者にも文書でそのことを通知した。最終考査である第5回考査終了後、総合成績が不振の生徒（原則：必修教科は評定1、選択教科は評定Cの者）については、再び補充授業を実施した。

イ 接続テストの結果と補充授業

後期課程の学習につながる大切なテストであるという生徒の意識の持ち方に多少の差があったものの、夏期休業中の学習への取組は概ね良好であったと思われる。ただ出題範囲が広く、思ったように学習の成果を出せなかった生徒もいた。この接続テストの結果に関する会議も行い、各教科より結果分析の報告があった。そして、各教科とも平均点の7割程度を目安に、補充授業対象者を決定した。

国語	社会	数学	理科	英語
13人	21人	17人	41人（各領域ごとに対象者を選定）	37人

補充授業の期間は10月初旬より1月の考査前後までで、放課後45分を使って各教科10回程度実施した。その後、補充授業の成果を確認するテストを行った。補充授業への取組はみな真剣であったが、苦手な生徒が集まっていることもあり、確認テストの結果については、全体的に大幅な成績向上にはつながらなかった。成果が出るには時間がかかるため、更なる継続指導が必要だと思われる。

ウ 補充授業該当者のその後

残念ながら補充授業の成果が十分に得られなかった生徒については、引き続き3月まで補充授業を実施し、後期課程の学習に備えることにした。

エ 今後の課題

この「接続テスト」は、昨年に続き2年目の実施であるが、今年度は夏休み明けに実施したため、補充授業は丁寧に進めることができた。課題としては、このテストの意義（苦手分野の発見、補充）について、保護者への周知や生徒への意識付けをもっと徹底すべきであったということである。大幅な成績向上という成果にはつながっていないが、基礎・基本の習得を徹底したことで、集団全体の学習に対する意識は概ね向上している。

(2) 理科課題研究 (4回生「理科Z」)

ア 目的

- ・ 自然の事物についての関心を高めるとともに、科学的な理論や原理に基づき実験や観察を行い、考察する実践力を養う。
- ・ 成果や考えを文章や口頭発表の形式で他人に伝える基礎的な能力を育成する。
- ・ 充実・発展期に向けて基礎学力の定着を体験的に図るとともに、希望進路に応じた望ましい科目選択を行うための足掛かりとする。

イ 活動結果

週4単位の理科Zのうち、4～8月は2単位時間を連続で、9月は全授業時間を割りあて、T・T形式で指導を行った。研究班は生徒1～3人で編成し、各学級で約25テーマの研究が行われた。9月にまず各学級で全研究班の発表を行い、優秀班を決定した。続いて各学級の優秀班が学年全体での発表を行った。全体発表会では来年度の実施に向けての意識付けのために、4回生に加えて3回生も全員参加した。また、4回生一人ひとりには、研究論文の提出を義務付けた。

ウ 評価

テーマ決定後に研究計画書を作成したり、研究中には研究日誌の記入をさせたりすることで自己評価を行った。また、教員が研究について助言や支援をする中で、活動の評価を行った。発表会では①態度、②わかりやすさ、③観察・実験の手法、④科学的な考察の4観点について評価を行った。この評価には理科教員全員があたるとともに、生徒同士も相互評価を行い、結果をKJ法により各班に示した。論文については①観察、実験の手法、②科学的な考察、③論文のまとめ方の3観点について理科担当教員全員で評価を行った。学年末の評価は、課題研究の評価が全体の3分の1を占めるように設定した。



エ 考察

自由な研究のため、当初はテーマ設定や活動時間の使い方にとまどっていたが、適切な支援と助言により、徐々に主体的な活動が見られるようになった。研究の深まりとともに、放課後等に研究活動を希望する生徒が多くなり、活発な取組が見られるようになった。一方で、科学的な根拠にもとづいて、実験や観察を自ら組み立てる能力に乏しい生徒もおり、「やる気」が空回りして、研究の深まりが見られない者もいた。基礎・基本期における問題解決的な活動の経験が少ないことが原因としてあげられる。

口頭発表は、非常にレベルが高かった。これはPC使用法に一定の知識があることと、海峡学等において発表の機会が多かった成果であると考えられる。一方で成果を文書にまとめる能力が低い生徒もおり、記述や編集の能力を育む必要性を痛感した。生徒の感想では、理科に関する興味や関心が高まったとする意見が多い反面、実験や観察の組み立て方に難しさを感じている生徒も多い。また、テーマの選定に制限を設けなかったために、非常に多岐にわたる活動が実施され、その準備や管理に追われ、また、時間割上の制限のため、理科室を十分に活用することができなかった。深まりのある研究に導くための指導が十分ではなかった。これらについては今後の対応方法を模索中である。

4 リトル・ティーチャー制

(1) 概要

「リトル・ティーチャー制」とは、後期課程の生徒で、その教科について関心、学力の高い生徒、教育系の進路をめざす生徒等が、下級生の授業において教員を補佐する制度のことである。この制度は、生徒同士が学年の枠を越えて交流することができるもので、中等教育学校の特性を生かす教育方法である。この制度によって、「リトル・ティーチャー」である上級生は、人に教えることの喜びや難しさを学ぶとともに、その教科についての理解を深め、また、下級生とより緊密な関係をもつことができる。下級生の側にとっても、身近な上級生の指導は受け入れやすく、教員一人の場合よりもきめ細かく教えを受けることができるなどのメリットが考えられる。

(2) これまでの取組

昨年度、本格的に授業の中での取組を開始し、保健体育科と理科の実技・実習を伴う2教科で実施した。保健体育科は「救助法」、理科は「化学領域の実験」の授業で、それぞれ選択科目を受講する6回生が2回生の授業においてリトル・ティーチャーを務めた。この2教科については、今年度も内容や指導方法等を工夫・改善し、継続実施をした。また、今年度新たに、実技・実習を伴わない教科・科目での実施を計画し、数学科において実施に至った。

(3) 平成19年度実施教科

- 保健体育科 : 学校設定科目「体育実践」を受講している6回生が、2回生の「保健体育」の時間に水泳の「着衣泳」の実習において指導した。
- 理 科 : 5回生の「生物」受講生と、6回生の「生物」「物理」の受講生が、それぞれ3・2回生の「理科」の時間に、実験等において活動の補助をした。
- 数 学 : 4回生の「数学Z」マスターコースを受講する生徒の一部が、2回生「数学」の図形分野の授業で論証指導を行った。

(4) 「数学科」リトル・ティーチャー制指導例

4回生の「数学Z」マスターコース受講者で、比較的進路意識も高い10名がリトル・ティーチャーとなり、少人数授業を実施している2回生の「数学」の授業に参加した。リトル・ティーチャーは、それぞれ2人の2回生に図形の論証指導を行うという形式をとり、ペアになった2回生が互いに図形の証明を口頭で説明していく中、多様な方法を用いて、かつ他人にわかりやすく説明する手段について支援をした。論証問題においては、教員1人による指導では各生徒の考えに対して細かい配慮を行うことが難しく、リトル・ティーチャー制を活用することで、2回生は効果的な学習ができる。また、今回単元として取り上げた「三角形の角の二等分線と比」は、中学校数学の図形分野において相似な図形と比の関係を扱うところであり、高等学校「数学A」で学ぶ平面図形の



学習の礎になる重要な学習内容を含んでいる。したがって、この授業を通して、前期課程と後期課程の内容をなめらかに接続することもねらいの一つとした。

事後アンケートによると、4回生の8割以上が、支援することを通して定理に対する理解が深まったと肯定的な回答をしているのと同時に、わかりやすく教えることの難しさを感じたようである。また、2回生のほぼ全員が、アドバイスをもらうことで証明や記述がよりうまくできたと答えており、年齢の近い上級生からの支援は受け入れやすく、それが授業中の積極的な発言や取組となって表れたものとする。「わかりやすい」、「このような授業を今後も行ってほしい」という生徒の意見が多く見られた。

(5) 今年度実施の総括

ア 効果

昨年度と同様、いずれの実践においても、リトル・ティーチャーとなった生徒は活動に意欲的に臨み、行事以外の場での異学年との交流も図れたようである。実際に下級生を目の前に指導をするということは難しく、計画通りにはいかない部分もあったが、指導者との打合せを重ねる中で、授業に取り組む姿勢も普段以上に真剣になり、自分の理解度を再認識するよい機会となった。また、下級生は、日頃と違う雰囲気での授業に関心を持ち、「上級生が手本を示してくれてわかりやすかった」「また教えて欲しい」等の感想を述べており、実施後のアンケートでは、教えた方も教えられた方も肯定的な回答をした生徒が多かった。

イ 課題

いずれの実践においても、実施に至る前のリトル・ティーチャーへの指導にかなりの時間を割いており、本来の授業の進度に支障を来すことも危惧される。また、数学科のように、一部の生徒がリトル・ティーチャーとなる場合も、抜けた授業の措置をどうするのか等の課題が残る。時間割の調整も大変で、同一教科で断続的に実施していくのは困難であると考えられる。

ウ 今後の方向性

今年度までの実施を踏まえて、リトル・ティーチャー制は、生徒の学習に対する動機付けという点において大いに意義があり、導入の形態や方法について再検討しながら更に研究を進めていく価値があるものとする。今後、リトル・ティーチャーの役割の幅や、実施実績のない教科・科目、総合的な学習の時間等での導入の可能性等について研究を深めていきたい。

5 教員研修

(1) 授業研究

本校が行っている校内研修は、「授業研究」と「授業研究以外の研修」に分けられる。前者の「授業研究」における重点目標を、「生徒が主体的に活動し、確かな学力を身に付ける授業の実践」として掲げている。この重点目標の土台となっているのは、本校学校教育目標を受けて設定した本校教務課の努力目標であるが、それは次の4点である。

- ・学習習慣の定着、授業・ガイダンスの充実により、学力の向上を図る。
- ・教育課程を適切に実施する。
- ・生徒が主体的に活動できるように、学校行事を適切に設定する。
- ・教職員間の連携、協力を図る。

これらを受けて、各教科の授業においても、生徒が仲間と協力しながら課題を解決したり、自分の興味ある事を追究したりしながら、「生きる力」につながる確かな学力を身に付ける授業をつくっていくために、年2回以上の授業研究を行ってきた。

ア 授業研究例

期 日	形 態	内 容 等	対 象・担 当 等
5月下旬~6月中旬	研究授業	芸術科「鑑賞『春』～弦楽器について（1回生）」	芸術科及び希望教員
6月上旬	研究授業	外国語科「英語Ⅱ（5-1・3、発展コース）」	外国語科及び希望教員

イ 今後の課題

研究授業が各教科単位で行われるため、研究授業の参観や事後の研究協議会へ、他教科の教員が参加しにくいという問題点が挙げられる。教科の枠にとらわれず、負担にならない範囲で積極的に参加し、より充実した授業研究を進めたいものである。特に、他教科の教員から見た素朴な意見や疑問から、思いもつかなかった授業改善のヒントを得ることもあるであろう。また、参観者の目から見て、生徒にどこで学びが成立していたか、あるいはどこでつまずきがあったかなどを率直に語り合うことで、授業づくりのみならず、生徒理解や教員集団の一体感もいっそう高められると考える。

今後の課題としては、全校をあげての授業づくりを行うための校内研修システムの整備が挙げられる。たとえば、各学年単位で学年主任を中心に研修会を持つ、というのも考えられる。担当学年の生徒の活動について意見を出し合うことで、それまでは気付かなかった生徒の違った面も見えるかもしれない。また、授業者があえて指導案を配布しないという方法も考えられる。指導案がなくても、ねらいが参観者に伝わる授業をしなければならぬし、参観者の側も指導案なしでその授業のねらいを見抜ける目を持ちたいものだと思う。もし、授業時間内でねらいが見抜けなければ、事後の研究協議会でそのことを率直に述べれば、そこから授業改善の話し合いが始まるとも思う。その他、中高一貫教育の学校という本校の特性を生かした「リトル・ティーチャー制」や習熟度別授業等の研修も進めていきたい。

これらの制度も活用しながら、本校の前期課程と後期課程の特性を生かした研修の機会をさまざまな形態で持つことにより、生徒にとって効果的で、かつ教員にとってもより充実した教員研修・授業研究を進めたいと考えている。

(2) 中高一貫教育の現状と本校の取組に関する教員研修会（平成19年8月）

【研修内容の詳細】

今年で開校4年目を迎えるが、開校準備に携わった教員も半数を切り、この新しい学校を作り上げてきたこれまでの過程を知らないままに、日々の仕事に追われている状況にある。本校の「特色ある取組」に、教職員も生徒もある程度は慣れてきたものの、その目的や本校が設立に至った背景まで詳しく知る教員は少ない。小学校から入学してきた第1期生が卒業してない現段階だからこそ、全教員が本校のめざすところをしっかりと確認し合い、それに向かって実践することがもっとも大切なことであると考え、この研修会を実施した。

「日本の公立学校で中高一貫教育が始まった理由」、「本校ができあがってきた過程」、「設立のコンセプト」等を再認識するために、構想案（H12完成）から紐解いて説明を行った。開校時に準備を進めてきた教員以外は、本校の今の形ができあがってきた状況が見えず、自分がこの6年間の学校の中でどのように動いていけばいいのかかわからないという声が多く聞かれる。6年間を一つのスパンと考えた教育活動を進めていくことは、予想以上に難しく感じるようである。

本校は山口県唯一の中等教育学校であるため、本校以外の中高一貫校の取組について熟知していない教員が多い。そこで最後に、全国の中高一貫教育の動向や中高一貫校の教育方針、具体的な取組を知るためのグループワークを行った。

■ [グループワーク] 他校（中高一貫校）のリーフレット研究 ■

中高一貫校への受検を予定している家庭にとって、受検する学校の基本的な情報を仕入れる手段は、一般に配布されているリーフレットやホームページに頼るところが大きいが、はたしてリーフレットのみで、どれだけ情報が得られるのか、どれくらい特徴が捉えられるのか、それを実際に感じてもらうことを目的として、全教員でグループワークを行った。

今回、全国の中高一貫校のリーフレットを8校分準備し、各グループ5～6名でリーフレットを研究した。学校の教育方針や、具体的な取組、特徴等について模造紙にまとめ、代表がその学校の教員になったつもりで学校のPRを行った。その後、リーフレットからだけではわからないこと、質問や疑問点について、同じグループ内の担当者が“生徒の保護者”になったつもりで疑問をぶつけた。このグループワークを通し、多くの教員から、「他の中高一貫校の取組が、ある程度理解できた」という声を聞くことができた。多くの教員が本校にはない“特色ある取組”に驚き、逆に「この取組は効果があるのか？」と疑問を投げかける場面があって、学校の外部の感覚を味わうことができた。これこそ、今回の研修会でもっとも狙っていたことであった。



このグループワークのあと、本校のリーフレットを再配布し、本校の取組について全教員で再確認した。下関中等教育学校に務める教員としてもっとも大切なことは、本校の取組をきちんと理解し、誰に尋ねられても“自信をもって”その内容を詳しく説明することができることであると考え。全教員がアイデアを出し合い、6年間の一貫教育で何ができるのか、何をやっていくべきなのかをこれからも模索していかなければならない。

6 総合的な学習の時間「海峡学」「東アジア文化入門」

(1) 概要

本校では、総合的な学習の時間を、6年間を通して週1時間学習する『海峡学』と、前期課程において週1時間学習する『東アジア文化入門』の二つの流れで実施し、下関の地域的特性を最大限に生かせるようにしている。『海峡学』においては、前期課程の3年間で「老の山探訪」、「下関の古典と芸能」、「海峡の町下関探訪」、「下関の産業と労働」、「下関の環境」、「下関の教育」、「下関の国際理解」と様々な分野について学習し、その発展的な内容として後期課程の4回生で「下関の国際理解②」、「テーマ別学習」、「下関の福祉」、5回生で「下関への提言」に取り組む。5回生後期から6回生にかけては、6年間の総合学習のまとめとして「卒業研究」の制作を行う。

また、『東アジア文化入門』は、韓国人・中国人講師と日本人教師のT・Tの授業で、日本と距離的・歴史的に近い関係にあるそれぞれの国の文化や言語について学習する。この『東アジア文化入門』は、後期課程の選択必修科目「ハングル」または「中国語」へとつながっていく。

(2) 今年度の取組

総合的な学習の時間の実施も4年目となり、1～3回生の内容については、生徒の実態に合わせて年々修正を加え、3年間の大きな流れがほぼでき上がった。今年度の4回生については、先頭を走る学年のため、手探り状態での実施になってしまったが、生徒は一つひとつの課題に対して、どのように取り組めばいいのか、その術を身に付けており、生徒のレポート作成能力やプレゼンテーション能力が高まってきている様子が、学習後の発表会を通してわかった。これは、生きる力を育む一つの方策として、『海峡学』が大変有効な手段であることの裏付けとなる。また、今年度韓国・中国との人的交流の場面が増えたこともあり、『東アジア文化入門』の具体的学習の成果を試せる場面が一気に増えた。今年度から、後期課程の選択必修科目「ハングルⅠ」と「中国語Ⅰ」への接続が始まり、この両教科へのなめらかな接続を意識しての指導も行えるようになった。

(3) 4回生の『海峡学』

ア 第1期「下関の国際理解②」(4～5月)

「下関の国際理解②」では、3回生の末に行ったオーストラリア語学研修旅行のまとめ・振り返り学習を行った。語学研修旅行後すぐに事後学習を行うことができなかつたため、計画よりも時間を多くとり、単発的な体験に終わらないようにした。内容も、これから出発する後輩へのリトル・ティーチャー的な指導を含めたものにし、本校の特徴を生かした指導を心がけた。

具体的には、生徒2人がペアとなり、語学研修旅行を通して学習した一つのテーマについて「ミニ報告会」を実施するという形式をとった(→7「語学研修旅行」(6)【事後指導4】)。

事後指導の徹底が課題であることがわかったため、今年度オーストラリアに行った3回生に関しては、帰国後すぐに事後指導を行い、春休みを含め、4回生に進級してからの指導を徹底する計画を立てている。10日間の一つの経験に終わらせることなく、こ

の経験を本校での学校生活に生かしていきたいと考えている。

イ 第2期「テーマ別学習」（6月～10月）

1～3回生の海峡学で学習した下関の「産業」、「環境」、「教育」、「国際理解」の中からもっとも関心の高い分野の一つを選び、前期課程3年間の学習の総まとめとして、その分野の中でテーマを一つ決めて、より専門的な研究を行った。1～3回生で学習した既習事項を深める研究であったことと、ほぼ同様の学習形態で行った「理科の課題研究」に取り組んだ時期と重なったこともあり、課題研究への取組に関するコツを得た生徒たちは、そのノウハウを最大限に生かし、レベルの高い研究発表を行うことができた。

ウ 第3期「下関の福祉」（11月～3月）

高齢化社会への対応やノーマライゼーションが提唱されている社会において、下関の福祉の実態を、福祉施設への訪問や、奉仕活動を行うことによって、身近な問題として考える機会とすることを目的に実施した。近年、高齢者や障害を持った方があまり身近にいない生徒にとって、「福祉」という言葉はなじみが浅く、縁遠いものを感じていたようだ。しかし、4か月にわたって本格的に学習したことで、福祉に関する知識は大きく広がり、また、知識の習得だけでなく、「ふれ合う」などの実践にこだわったフィールドワークでの経験が、生徒の福祉に対する印象を大きく変えた。

フィールドワークにおける各施設への訪問に関しては、生徒が自分たちで交渉を進めた。訪問の交渉がうまくいかないこともあったが、それも一つの経験として良い社会勉強になったとの感想が生徒から聞かれた。

また、下関社会福祉協議会の協力で、盲導犬と生活されている市民の方の話聞く機会を得た（→10「地域とともに歩む学校作り」）。下関には盲導犬がわずか2頭しかおらず、また、本校には特別支援学級等もなく、障害のある方とふれ合う経験も少ないため、今回の講演を通じて、「障害者の方と出会ったとき、どう接したらいいかわからない」という不安は、かなり解消されたようである。



（4）総合的な学習の時間「海峡学」「東アジア文化入門」の効果と課題

開校4年目となり、「海峡学」「東アジア文化入門」ともに、6年間の全体計画を見通した中で余裕をもった準備ができており、生徒も効率よく学習を進めることができている。「海峡学」では、ほとんどのテーマで調査・研究活動や、研究発表などが組み込まれており、それらの活動を通して生徒たちは「調べる」「考える」「まとめる」「発表する」力を着実に身に付けてきている。本校の特色ある教育活動の一つとして、ぜひこれからも力を入れていきたい。また、これらの時間を通して地域と深いつながりをもつことができたが、今後も地元大学との高大連携の可能性を含め、可能な限りで地域とのかかわりを深めていきたい。それらを通して、本校の生徒の様子や教育活動を、地元の方々に知っていただくという効果もねらいたい。

7 オーストラリア語学研修旅行

昨年度末（平成19年3月）、小学校から入学した第1期生（現4回生）が、開校初のオーストラリア語学研修旅行を行った。この語学研修旅行は、本校の教育目標である「世界に飛躍する人材の育成」のための一つの方策として、3回生の末に10日間の日程で実施している。オーストラリアの代表的都市シドニーにて約1週間、一人一家庭でのホームステイをしながら、午前中は現地の公立校訪問や、シドニーの動物園や観光名所を廻るなどのアクティビティを行い、午後は現地の語学学校で語学中心の研修を受けるというたいへん充実したプログラムとなっている。

本校は、授業の中で外国人教員から言葉や文化を教わる機会が多く確保されている。海外からの来客も多いため、生徒たちは外国人とのコミュニケーションには比較的慣れている。その生徒たちが、海外での研修の中で実際に異文化に触れ、実体験の中から生きた英語を学んだり、語学学校やホームステイ先で、前期課程で身に付けた英語の活用能力を試したりすることにより、異文化理解を深めたり、コミュニケーションの自信を高めたりすることを期待した。

ほとんどの生徒が初めての海外渡航だったため、渡航前の不安はとて大きかった。特にホームステイについては、60%を超える生徒が「英語は通じるだろうか」、「うまくコミュニケーションがとれるだろうか」、「本当に一人で大丈夫だろうか」、「食事は合うだろうか」と何かしら不安を口にした。これらの不安は当然のものであると考えるが、実際に現地で成功も失敗もする中で、異文化との交流によって世界への視野を開き、一回り成長することを期待した。

（1）訪問地・訪問時期について

ア シンガポール

飛行機の乗り継ぎの時間を利用し、シンガポール観光を行った。観光地として有名なマー・ライオン公園では、生徒たちは現地の方や外国からの観光客に積極的に英語で話しかけるなど、英会話の授業で培われたコミュニケーション能力を早速発揮した。このシンガポールでは「アジア英語」が使われているため、生徒ははじめのうち、独特の発音やイントネーションに大変苦労していた。英語にも国や地域によって様々な特徴があることが実感でき、一つのよい経験となったようである。



イ シドニー

今回訪問したシドニーは、オーストラリアの主要都市で人口約400万人、イギリスやアイルランド系、アジア系の移民が多く、季節を問わず世界各国からの観光客も多い。街中では英語だけでなく、中国語やフランス語など様々な言語が耳に入ってくる。そのため、街の人々、ショップの店員は本校の生徒が片言の英語を話しても柔軟に対応してくれる。したがって、英会話の力がまだ十分とは言えない生徒でも、比較的安心して街中を歩くことができた。生徒が通った語学学校は街の中心にあり、そこからシドニー市内の観光名所はほとんどが徒歩圏内であった。バスや電車などの交通手段も利便性が良く、生徒の日々の通学や観光地への訪問も苦労することはなかった。事後アンケートでは91%



の生徒が「もう一度シドニーを訪問したい」と答えており、15歳の生徒が訪問する場所としては、総合的に適していると言える。

(3) 語学学校について (Australian Pacific College [以下APCと呼ぶ])

今回利用した語学学校は、シドニーの中心駅からわずか徒歩7分と、日々の拠点としてたいへん便利な場所にあった。契約しているホストファミリーは300軒以上、日本人常駐スタッフは3人いて、120人の本校生徒を受け入れるには十分な体制が整っていた。語学学校の授業を担当する講師陣の年齢層、出身国は様々であり、下は23歳から、上は50歳台。出身国もさまざまであった。授業内容も統一されておらず、講師陣のオリジナリティーが表れていた。

語学学校での授業はチューター会(20人)ごとに行われた。最初は、速くて聞き慣れないイギリス英語の発音に戸惑う生徒もいた。しかし、授業内容がシドニーでの英語生活に役立つように仕組みられており、約75%の生徒が、「語学学校での授業は英会話力向上に役に立った」と答えた。わずか5日間の学習ではあったが、プログラムに沿った英語の学習は、1週間のシドニー生活に良いリズムを作った。



(4) アクティビティ

ア 現地公立学校との交流

シドニーの郊外にある公立高校 Chatswood 高校との生徒間交流を行った。まず、本校の生徒2人に対し Chatswood 高校の生徒1人が付き、校舎を案内して廻った。その後、講堂で世界第2位になったというブラズバンドの演奏を聞いた。その迫力ある演奏に本校の生徒は圧倒された。本校からは、「日本式応援」、「校歌」、合唱コンクール課題曲の「大地賛頌」を披露した。その後、授業に参加したり、外で話をしたりと、予定されていた交流会はなかったが、同世代との交流の時間を楽しんでいた。92%の生徒が「貴重な体験であった」と答えており、この現地公立校訪問は有意義な時間であったと感じたようである。



イ シティーウォークツアー

APCの教師の引率により、市内の要所、観光スポットを見て廻った。初日は昼食をとるのに便利なスポット、電車・バスの乗り方等、1週間の生活に必要な情報を得るための見学であった。2日目からはオペラハウス、タロンガ動物園、シドニー植物園などの名所を見て回った。いつもと変わらないメンバーできているため、外国にいるという雰囲気が感じられないツアーであったが、廻っている途中、地元の高校生と記念撮影をするなど、生徒の積極的な行動が光った。

ウ 班別自由行動

語学学校最終日の午前中は、班別に市内を散策した。オーストラリアに来て1週間たった頃には、英語での買い物にはほとんど抵抗がなくなっていた。シドニーはもとも

と物価が高い街であったが、生徒はディスカウントを要求するなど、培ったコミュニケーション能力を遺憾なく発揮していた。

(5) ホームステイ（ホストファミリー）について

ホームステイ先は、語学学校と契約している家庭が割り当てられる。欧米系、東南アジア系、中国系、中には日本系の家庭もあって、様々であった。年配の方で子どもが独り立ちし、空き部屋があるので受け入れているという家庭が多かった。また、ホームステイ先に自分以外の留学生がいたという家庭が45%もあり、多いところは一つの家庭に7名の留学生がいた。日本人の大学生がいて、日本語を使うことになった生徒もいた。留学生がいる家庭は、ホストファミリーよりもむしろ留学生と一緒に過ごすことが多かったようである。



(6) 事後指導

この旅行出発前は、過去に前例がなかったため、信頼できる情報が少なく、不安や心配を口にする生徒・保護者が多かった。そこで、現地での事故を防ぎ、安全で充実した語学研修旅行にするために、現地で必要な情報や便利な情報を伝える「報告会」を実施し、生徒・保護者の不安を少しでも取り除けるようにしたいと考えた。また、参加した生徒にとっても、事後学習を行うことで、これからの学校生活に対する意識の高揚をはかっていけると考え、以下の事後学習を行った。

【事後学習1】 オーストラリア語学研修旅行報告書（日本語）

【事後学習2】 Personal Mission

【事後学習3】 ホストファミリーへのお礼の手紙（英文）

【事後学習4】 オーストラリア語学研修事後報告会
海峡学（4・5月）、学校祭（6月）、
選抜説明会（11月）、チューター会（2月）

【事後学習5】 英会話の授業で Show and Tell



(7) 今後の課題

総合的な学習の時間や英会話の授業を使い、可能な限り事後指導を続けてきたものの、3回生の年度末にあった行事のために、指導時間の確保が難しく、教員の配置転換や転勤等も重なって充実した指導ができたとは言えない。4月から行った事後学習に、生徒たちは真面目に取り組んだが、春休みをはさんだことで、研修や英語学習への気持ちの入り方が弱くなったことは否めない。帰国後すぐに、「学校で」事後学習をさせる日がほしかったというのが、引率した全教員の共通意見であった。

今後オーストラリア語学研修を実施するにあたっては、担当学年の教員だけでなく、全校体制で事後指導を徹底する必要がある。そして、「語学学習」と「研修（社会勉強・国際理解等）」という、学んできた大きな二つの柱について、生徒たちの今後の学校生活につながるよう仕向けていかなければならない。

8 チューター制

(1) 今年度の取組

ア チューター会の運営について

生徒の進路選択にさらにきめ細かく対応するために、今年度から1・2回生で週2日、3回生で週4日、後期課程生で毎日7限授業を実施した。そのため、昨年度まで行っていた6限終了後の25分の「チューター会の時間」が削減され、3回生では週1回の実施、後期課程では実施しないことになった。日々の教育活動の積み重ねの中でチューターと生徒との関係を作っていくのが前提であるが、やはり、チューター制という新しい仕組みを明確かつ有意義なものにするためには時間的・空間的な保障も必要であると考え、昨年度末に議論を重ねた。その結果、後期課程では朝・夕のSHRにあたる10分間をチューター会単位で行うこととし、短い時間であるが「チューター会の時間」と考えて、昨年度までの成果を生かせるような取組を工夫していくこととなった。

また、従来の「正担任・副担任」という学級単位の考え方が本校のチューター制になじまないという反省から、今年度は1クラスを2人のチューターが協力して経営する方針をとった。1人の生徒に対し、クラス担当の2名が協力して指導に当たることとなる。

イ 成果と課題

2人のチューターが協力して学級経営にあたるという変更点に対しては、教員アンケートで「一方がもう一方のチューターを補佐する副担任の役割もうまくこなせている」「クラスの活動がしやすく、クラス全体に目が届きやすい」という長所が挙げられたように、チューター担当とクラス担当の役割をうまく生かせるようになってきている点で効果があったと考える。以前はチューター会活動と学級活動が区別されていたが、今年度は必要に応じて学級活動を2チューター会合同の活動と位置付けることが容易になり、学級集団とチューター会の少人数集団とのそれぞれの良さを生かした効果的な活動が行えるようになった。

一方、「チューター担当ではない半分の生徒への意識がどうしても薄くなってしまう」「チューター会とクラスの比重の置き方が難しい」という昨年度までと同様の課題もある。特に前期課程では、一日をほぼ学級で活動するため、学級集団の存在が大きく生徒の集団帰属意識や友人関係に大きな影響を及ぼすので、チューター会と学級とのかかわりについて引き続き検討を重ねていきたい。また、2人のチューターの協力・連携・分担の仕方等これからさらに研究を進めていく必要がある。

また、前期課程では道徳の時間の指導をチューター会20人で行っている。今年度93%の生徒が「道徳の授業をチューター会で行うことはよい」と回答しており、肯定的意見は昨年度より23%も増加している。アンケートの母集団が異なる違うため、昨年度と単純に比較することはできないが、20人のチューター会制度がしっかり定着していることの表れではないだろうか。しかし、最も多くの時間を過ごす学級のメンバー同士で、道徳的価値判断を学び合うことも必要である。ここでもチューター会と学級の特性を生かした指導の方法を考えていきたい。

チューター制の基本理念にある「年齢差のある生徒同士の相互作用」については、

これまでの実践の中で毎年出された問題点を修正していく中で、行事で異学年集団を活用するという形が定着してきて、生徒の中にも自然に受け入れられている。また、4回生が3回生にオーストラリア語学研修の体験を伝えるなど、行事以外でも異学年集団を効果的に活用する取組が行われた。行事以外の活用について今後もアイデアを出し合い可能性を探っていけば、興味ある取組になると期待できる。

朝の10分間を「チューター会の時間」とすることについて、昨年度までのSHLの意識が残っていたためか、当初は伝達のみで終わり早く終了してしまうチューター会もあった。そこで、朝10分間の十分な活用を教員に再度提案し、以後チューター独自や学年全体での取組が続いている。年度末に行った教員へのアンケートでは、「朝読書に取り組んで本を読む生徒が増えた」「落ち着いて一日をスタートさせることができた」という効果も上がっている一方で、「伝達事項や学年で決めた朝学習があり、独自の取組を継続させるのが難しかった」「事前・事後の指導をする時間がほしい」「生徒の自発的・主体的活動を促すには時間が確保されるべき」といった、時間の不足を指摘する意見も多くあった。また、夕方の10分間は清掃後で全員がそろうのに時間を要し、10分間を確保するのがさらに難しい現状にある。

本校のチューター制は、試行も含めると開始してから6年が経つ。さまざまな活動を通して、「チューター会」が本校の生活の基本単位であるという意識が定着してきたことが、生徒へのアンケート結果の推移からもわかる。ようやく根付いた「チューター会」を発展させるために、現在の教育課程の中での「チューター会の時間」の確保と有効な活用をさらに研究していく必要がある。来年度はチューター会の時間の活動事例をまとめることにより、チューター会相互の情報交換や方法の共有ができるようにし、夕方の10分間の活用についてもさらに検討していく予定である。

ウ 今年度の「チューター会活動例」

<前期課程>

- ・チューター会単位で行う行事の準備（フレンドシップキャンプ、且陵祭、体育大会、前期集会、学年集会、チューター会対抗戦、合唱練習、意見発表会、百人一首大会、駅伝大会等）、教育相談、到達度テストの計画と家庭学習の指導、英検対策、自主学習ノートの指導、進路学習（自己分析、将来の夢、職業調べ、オープンキャンパスへの参加）エンカウンター（人間関係作り）、学習指導（朝学習、昼休み・放課後の学習会、1日1ページ学習）、オーストラリア語学研修旅行に向けて、俳句の創作、朝読書、道徳等

<後期課程>

- ・チューター会単位で行う行事の準備（且陵祭、チューター会対抗戦等）、個人面談、教育相談、進路指導、学習指導（夏休みに向けて、1学期の学習結果の反省とフィードバック、進級に向けて、自己目標・学習計画の設定、朝学習）、1分間スピーチ、面接の準備、卒業に向けて、文集作り等

9 韓国・中国との交流

(1) 概要

本校は、「地域の特性を生かし、国際化の進展に対応した学校づくり～ゆとりの中で生きる力を育み、誇りと自信をもって世界に飛躍する人材の育成～」のコンセプトのもと、様々な交流を通して広い視野に立って物事を考え、行動することができる国際感覚を身に付けるとともに、国際交流の一層の推進と友好の和をさらに深めることを目的として、今年度は以下の取組を実施した。

(2) 今年度の取組

ア 海外から本校への訪問

①中国山東省実験中学校	H19. 7. 30	生徒35名+教員4名	計39名
②中国山東省新営中学校	H19. 8. 1	生徒19名+教員等15名	計34名
修学旅行の一環で本校を訪れた両校の生徒が、生徒会執行部の案内で、日本文化部、管弦楽部、ダンス部の活動を見学・体験した。(①、②ともほぼ同じ内容)			
③晋州高校ホームステイ	H19. 8. 16~18	晋州高校生5名	
姉妹校の晋州高校の生徒5名が、本校生徒の4家庭にホームステイをした。			
④韓国慶尚南道教員山口県訪問団	H19. 11. 21	教員12名	
視察のために本校を訪問。東アジア文化入門の授業に参加し、本校生徒と交流した。			
⑤韓国京畿道安養市立富安中学校	H20. 1. 16	生徒39名+校長・教員2名	計42名
修学旅行のため来日した生徒39名が本校を訪問。東アジア文化入門の授業に参加。			

イ 韓国・中国への訪問

①日韓高校生交流事業	H19. 9. 9~14	4回生7名+教員1名	計8名
本校から7名が参加。ソウル市の明德外国語高等学校を訪問。英語の授業に参加した。			
②慶尚南道派遣事業	H19. 9. 29~10. 5	4回生1名、5回生1名	計2名
県内の14名(本校:2名)の高校生が参加。釜山の高校3校を訪問し、生徒と交流。			
③2008年日中青少年訪中代表団	H20. 3. 10~3. 16	4回生7名、5回生1名	計8名
「日中青少年友好交流年」の開幕式に日本青少年訪中代表団の一員として本校から8名が参加。本校生徒が団を代表し、胡錦濤国家主席らを前にあいさつを行った。			

(3) 総括

本校は昨年度、韓国慶尚南道晋州高等学校と姉妹校の締結をし、生徒会によるメール交換や美術、書道の作品交換などの交流を行った。今年度はホームステイや学校訪問などの取組を実施し、さらに交流の輪を広げることができた。参加した本校生徒は、日本と外国の違いを肌で感じただけでなく、自国の良さを再認識したり、日本が外国から学ぶべきことに気付いたり、国際的な視野を広げることができた。また、生徒たちは「東アジア文化入門」や後期課程の「ハンダール」、「中国語」の授業で、韓国や中国の言語や文化などについて学習しているが、これまで身に付けてきた知識を試すことができ、今後の学習の動機付けになったことも大きな成果である。今後は生徒がこれらの経験から学んだことをどう消化し生かしていくかが、参加した生徒にとっても、学校側にとっても重要な課題である。

10 地域とともに歩む学校づくり

(1) 概要

本校は、生徒の通学範囲が県内全域にわたっており、地域と子どもたち、地域と保護者との密接な関係を築きにくいという現状がある。そのために、「地域とともに歩む学校づくり」の推進が特に求められている。

そこで、地域社会と学校との連携を深める方策の一つとして、地域の人材を積極的に本校に招き、講演会や出前授業を実施している。地域と子どもを結ぶだけでなく、保護者からも参加者を募ることで、親同士、また親と学校を結ぶ機会を作ることも目的の一つである。また、多岐にわたる講演会を行い、多くの人々とのかかわりの中で、子どもたちの広い視野や豊かな人間性などの生きる力の育成を図る。

(2) 今年度の取組

名 称	実施日	講 師	対象学年
進路指導講演会	6 / 5	徳永宏幸 (東亜大学学習情報部長)	6 回生
		吉村秀二 (ライセンスアカデミー)	
		伊藤宜範 (大原公務員専門学校)	
平家踊り練習会	6 / 7、14、 21	坂本セツ子、村上住子 (下関平家踊り保存会彦島連)	1 回生
進路指導講演会	6 / 26	久田佳孝 (河合塾)	3 回生
性教育講演会	9 / 18	田村晴代 (藤野産婦人科)	5、6 回生
職業理解のための分野別講演会	9 / 25	植村茂信 (梅光学院大)	4 回生
		山口 恵 (梅光学院大)	
		徳永宏幸 (東亜大)	
		田中 功 (梅光学院大)	
		内海孝之 (山口東京理科大)	
		藤井謙治 (西日本工大)	
		中岡 寛 (九州栄養福祉大)	
		滝本和子 (宇部フロンティア大)	
		奥村チカ子 (熊本保健科学大)	
		長 普子 (第一薬科大)	
		大久保伸一 (九州共立大)	
村田宏司 (下関理美専)			
薬物乱用・ダメ。ゼッタイ。教室	11 / 6	山田崇明 (少年安全サポートセンター)	全学年
		福永佳子 (西部少年サポートセンター)	
		半田周祐 (彦島警察署生活安全課)	
講演会 (国際理解)	11 / 15	中川清隆 (下関市国際課課長)	3 回生
講演会 (キャリア教育)	11 / 19	前田 登 (前田海産会長)	4 回生

出前講座・体験授業	11/27	坂本敏幸（さんぼう）	5回生
		伊藤宜範（大原公務員専）	
		上野博美（さんぼう）	
		中野新治（梅光学院大）	
		素川博司（下関市立大）	
		中園真人（山口大）	
		久保田トミ子（宇部フロンティア大）	
		山永耕平（九州産業大）	
		棚崎由起子（宇部フロンティア大）	
		稲員祥子（下関短大）	
		大野義武（福岡美容専）	
		鬼村育宏（九州ビジュアルアーツ）	
新上 愛（麻生外語専）			
梅光学院大学出前講座	12/18	村中李依（梅光学院大）	5回生
講演「盲導犬との生活」 （海峡学：下関の福祉）	2/15	渡辺由香	4回生

（3）その他の取組

名称	実施日	来校者	対象学年
プロムジカ女声合唱団交流会	7/12	ハンガリープロムジカ女声合唱団	全学年
外務省職員による講演会	10/30	石井秀明（外交官）	4回生
教育講演会	11/7	池間哲郎（アジアチャイルドサポート）	全学年
芸術鑑賞会	11/20	九州ムジカークライス	全学年

（4）総括

実施後の感想によると、これらの講演会等を通して、自分の生き方や在り方について考えるきっかけとなったと答える生徒が多かった。それぞれの講師の経験に基づいた説得力ある講演に、全員が真剣に聞き入っていた。進路に関する講演会では、各分野の専門家から適切なアドバイスを受け、夢の実現に向けて自分の方向性を確認したり、将来について見つめ直したりする機会となったという感想が、参加した大半の生徒からあがった。教員や親などとは違った立場から助言や知識を得られたことは、生徒にとって新鮮で、よい刺激となったようである。

また、講演会の中には保護者が参加できるものもある。保護者にとっても、このような講演会等に足を運ぶことで、普段の学校の様子を知ったり、他の保護者とかかわりをもったりすることができているようである。多くの取組が新聞やテレビでも報道され、本校の教育活動についての周知を図ることができた。家庭と地域、学校との結び付きを強化していくという意味でも一定の効果があったと思われる。

どの講演も実りの多いものであったが、対象学年が限られているなど、学校全体の取組には至らなかったものもあるため、今後よりよい実施方法等について検討を重ねていきたい。

V 実施の効果

1 児童・生徒への効果

- ① 「他の学校とは違う環境の中で学校生活を送ることができている」ということを、どの学年の生徒も肯定的にとらえている。アンケートでは89%の生徒が「本校には、他校にないよい特徴がある」と答えている。特に、チューター制や特色ある教科指導、リトル・ティーチャー制などの本校の研究開発の柱となる取組は、概ね生徒から評価されている。また、80%の生徒が「本校に入学してよかった」と答えている。
- ② 9月に行ったアンケートでは「学級以外にチューター会という制度があることはよい」と答えた生徒が1年生91%、2年生86%、3年生65%、4年生74%となった。また「チューター会で行う活動に積極的に取り組んでいる」と答えた生徒は、1年生87%、2年生84%、3年生68%、4年生75%であり、学年によりチューター会制度へのとらえ方はまちまちであるものの、生徒にとって本校での学校生活の基本単位は学級ではなく「チューター会」であることを認識して学校生活を送っていることがわかる。今年度から学級担任、副担任という呼称をなくし、チューター会のシステムをより強調する形をとった。この結果、学級は主に学習の場、チューター会は緊密な人間関係の中で様々な活動を行う場という役割が明確になり、チューター会を担当する教員にとっても個別指導がより行いやすくなった。2人のチューターで学級を担当することにより、お互いに助け合い、お互いのよいところを出し合って高め合うという効果が生まれている。ただ、前期課程は学級で過ごす時間が多いために、生徒指導的な問題も学級で起こることが多い。学級が果たす機能や役割を考えた指導も引き続き不可欠である。一方、後期課程は毎日7時間授業のため、朝・夕10分間ずつのチューター会では、委員会等の話し合い活動も十分にできていない。チューター会の時間の確保と、朝・夕の10分間の使い方について更なる研究を進めていく必要がある。
- ③ 1・2年生では、「学校に来るのが楽しい」という生徒は90%をこえているものの、3・4年生ではその割合が減少している。学習内容の難化や生徒の発達段階として予想できる結果ではあるが、保健室やカウンセラーへの相談件数も増えていることから、ガイダンス機能を充実させるとともに、教育相談等により生徒の変化・悩みにいっそうきめ細かく対応する必要がある。日々の学校生活の中で生徒たちが工夫し、自らの生活スタイルを見付け出して充実感や達成感を味わえるような学校生活を過ごせるよう、学校側のバックアップ体制を作っておく必要がある。
- ④ 2・3・4年生において「学習の仕方がわからない」と答える生徒が増えている。4年生は高等学校の学習内容に入ったことで、難易度や授業のスピードが上がったことをその理由に挙げる生徒が多い。また、義務教育が終了したことで様々な面で自由が生まれ、各個人の自主性に任せられることに戸惑いを見せ、自分のペースを作れていない生徒もいる。4年生には基礎・基本期の最終学年であることを自覚させ、早いうちに自分なりの学習スタイルを確立して5年生以降の充実・発展期で実力を存分に発揮できるよう、継続性のある支援体制を作っておく必要がある。また、前期課程においても「普段、家庭学習をしない」生徒の割合が30%を超えている。2・3年生においては、高校受験がないために中

だるみの時期が長いように感じられるが、各教科の学習のみならず、海峡学で行う職業調べ（1回生）・職場体験学習（2回生）・大学オープンキャンパスへの参加（3回生）や、進路講演会（各学年）など、本校で取り組んでいる様々な体験活動と絡めながら、学習する意義を自らの体験の中から体得させたい。

2 教員への効果

- ① 開校4年目を迎え、前期課程・後期課程の両方の授業を担当する教員は半数を超えた。開校当初は授業のレベルをどこに合わせたらよいのかなど、教える立場の教員が戸惑うことも多かったが、少人数指導・習熟度別授業・選択教科が増えたこと、また、各教科でそれぞれ授業研究やリトル・ティーチャー制の授業を行ったことにより、自然な形で生徒の発達段階に応じた授業が行えるようになった。また、学校行事や部活動の指導を通して、前・後期の生徒と一緒に活動する場面が増えたことも、生徒理解の面で役に立っている。
- ② 昨年度完成した「Study Guide」は教員にも大変好評で、チューターや教科担当として生徒にかかわる際に、6年間の一貫教育を意識した指導がしやすくなった。また、「Study Guide」の修正やシラバスの再検討を毎年各教科にお願いしているため、年を追うごとに生徒の実態に合わせたものに改善されている。「本校が一般の中学校とは違う教育課程・シラバスであることを意識して学習指導を行った」と答えている教員がほとんどであるが、様々な進路希望を持つ生徒の実態に合わせるためにも、内容の精選・再配列や指導方法の効果・妥当性については、それぞれの教科において継続的な検討が必要である。
- ③ 研究開発に対する教員のかかわりの意識を高めるため、新着任者に対するオリエンテーションを実施したり、学校評価のPDCAサイクルを迅速に機能させたり、シラバスの見直しや前述の「Study Guide」の作成を各教科に依頼したり、「チューター会経営計画」の作成を各チューターに依頼したりした。また、研究開発に関する職員研修会を行い、全国の中等教育学校の特徴や、具体的な取組について研究した。これまで知らなかった他校の特色ある取組を知ったことで、本校が行っている特色ある取組の目的がはっきり見えたという感想が多くの教員から聞かれた。6年間過ごした生徒がまだいない今の段階でも自信をもって取り組めるよう、本校の一つひとつの取組が何を目的に行っているのか、他校とは何が違うのか、本校のめざすところがどこなのかを全教員にはっきり見える形にしていく必要がある。
- ④ 生徒の学力をより客観的に把握するための資料として、後期課程は3～5回生で英語コミュニケーション能力テストを、前期課程全学年においては標準学力テスト（4月）、学力推移調査（11月）、英語検定（1月）を実施した。今年度は3回生対象に全国学力調査も行われ、これについても各教科で分析を行い、今後の指導方法の改善に向けての研究を行った。学力推移調査の結果については、外部講師を招いて教員研修会を開いた。その結果、「生徒の学力が客観的に把握でき、現在行っている教育活動の効果が見えてきた」という意見が増えた。

3 保護者等への効果

- ① 保護者対象に行ったアンケートでは、本校の教育に対する評価は概ね高かった。
「チューター会というシステムは有意義である」84%、「少人数指導は学力の向上に役立つ」99%、「施設設備が充実している」95%、「教員は誠実に対応している」78%、「子供が入学してよかった」93%という回答が得られた。一方「ボランティア活動が盛んである」については55%と、他の項目に比べ低かった。生徒の歳末助け合い運動への参加者は120名にのぼるなど、生徒会の企画によるボランティア活動は年々盛んになっているが、まだ短期間実施のものに限定されている。今後は、年間を通じて行うボランティア活動を模索していく必要がある。
- ② 80%の保護者の要望に「学力の向上」が挙げられている。本校の特色ある体験活動を充実させながらも、確かな学力を身に付けるために学習と体験活動のバランスのよい教育活動を展開していく必要がある。
- ③ 学校開放として毎年行っている小学生対象の英会話教室、保護者及び彦島地区内 住民対象のコンピュータ教室、東アジア文化入門の三つの講座に、今年度は延べ51名の参加者があった。英会話教室については、今年度も彦島地区小学6年生に募集を行ったところ、11人の参加希望があった。新聞報道を通じて下関市内からさらに6名の応募があり、17名で8回の教室を実施した。受講後のアンケートでは、「外国人の先生と話ができ、英語の楽しさがわかった」、「他の小学校の人とかかわれてよかった」というような感想がたくさんあり、受講者の多くが本校を志願した。大人対象の東アジア文化入門講座にも親子での参加を含む10名以上の参加があった。特に調理実習では、日本語に堪能な本校の韓国人・中国人講師の指導のもと、それぞれの国の料理を作り、その中で文化の違いを発見することができ、異文化理解が深まったと好評であった。また、今年度も小学生と保護者を対象にした学校公開を実施した。計4回行ったところ、延べ500人を超える参観者があった。
- ④ 本校の保護者は、学校の取組について大変関心をもっており、学年行事等に前期課程ではほとんどの保護者が、後期課程でも高い割合で来校している。「PTA総会、授業参観日、保護者会など、学校との連携を深める機会に参加したいと思われませんか」という問いに対して、88%の保護者から、「そうしたい」という回答があった。学校祭、体育大会、合唱コンクール等の学校行事をはじめ、PTA主催の研修会、進路講演会、国際理解に関する講演会、芸術鑑賞会などにも多数の保護者が自主的に参加している。これは、本校の教育活動に対する関心の高さの表れであるが、生徒の実際の活動を見ることで、本校の取組に対する理解はより確かなものになっている。

VI 研究開発実施上の問題点及び今後の研究開発の方向

1 全体的な取組について

- ① 時代とともに社会背景も年々変化しているが、学校教育界でも、次回の学習指導要領の詳細が決定するなど、新しい時代に対応した動きが出始めている。本校の構想案は、前回の学習指導要領を受けて8年前に完成し、本校はそれをもとに開校時から特色ある取組を実践してきた。来年度、開校5年目を迎えるにあたり、本校が積み上げてきたものを継続しながらも、新しい時代の流れも視野に入れ、これから本校のめざしていく方向を確認していきたい。そして、我々が自信をもって、継続して進めていける形を確立するように努めていきたい。
- ② 今年度、前期課程入学生の1期生が4回生となった。中等教育学校は、高校入試がないことが大きな特徴であるが、アンケートで「高校入試がないことは、生徒にとってプラスになっている」と回答した教員は、わずか10%であった。上級生でもなく、下級生でもないと感じている3、4回生の生徒には、「学校生活全体に緊張感が欠けている」、「学習意欲が高まらない」というような問題がある。6年間の学校生活の中で、学校行事等のほとんどを全校一体で行っているため、上の立場に立ち下を引っ張るという経験が少なく、リーダーの育成の面でも課題が残る。6年間、中断なく学習や学校生活を進めていくことのメリットを今一度確認し、適切なシステムやガイダンスの工夫により、生徒の意識や取組をうまく切り替えさせるような方策を検討していかなければならない。
- ③ 6年間の学校であるからこそ出てくる「中だるみの問題」、「教育課程・教科指導の継続性と切り替えの問題」、「進路指導の問題」等に対応するために、接続テストや習熟度別授業、進路講演会等の取組を行ってきた。しかし、本校に着任する前に中学校と高等学校で経験を積み、3年間のスパンで教育活動を行ってきた教員にとって、6年間という長いスパンで教科指導、生徒指導、進路指導等を行うのは、想像以上に難しく感じるようである。引き続き、中高一貫教育に関する研修会や先進校の事例研究等を継続していかなければならない。また、6年間の教育課程が一目でわかる「Study Guide」のようなものを、「総合的な学習の時間」等、6年間を通して行う他の取組に関しても作成をめざしていく。
- ④ 今年度、学校説明会、学校開放、中等教育学校通信の配布やホームページの大幅な更新、新聞やテレビ等のメディア等で、多方面にわたって本校の取組についての広報活動を行ってきた。その結果、受検した小学生の出身小学校は50校を超え、本校に兄・姉がいる場合、弟・妹の95%は本校を受検している。しかし教員や保護者にアンケートをとると、本研究開発の取組が広く一般に「十分理解されている」と考えているという結果は出ていない。今後も、本校の取組が県民に正しく正確に理解されるよう、情報発信を続けていく。
- ⑤ 本校のめざすところであり、保護者の期待するところでもある「豊かな人間性の育成」「個性の伸長」は、本校の特色ある取組だけでは実現しない。また、「学力の伸長」に関しても、学校での学習だけで達成できるものではなく、家庭学習時間をどれだけ確保できるかがその鍵となる。これからも、地域力、家庭力を生かした教育活動の展開をめざしていく。

2 研究開発の中心となる具体的な取組について

(1) 教育課程・教科指導について

開校4年目を迎えた今年度、学校設定科目であるZ科目の位置付けや実施方法について、いろいろな効果や課題が見えてきた。詳細は、「Ⅲ－1－(4)教育課程の効果と課題」で述べたとおりであるが、現在進めている6年間を見通した教育課程・教科指導の形が、本当に最も効果的なものであるのかどうか、実践と検証を重ねて研究を継続していきたい。開校5年目となる来年度、最初の入学生が「充実・発展期」を迎えるが、基礎・基本期での学習をどのように発展させていくか、具体的方策を考え、実践していかなければならない。

また、生徒の学力に大きなばらつきがある本校は、少人数授業や習熟度別授業が必要とされる学校である。それに加え、課外授業や個別指導等、授業以外での対応もさらに必要になると考えられる。

(2) 総合的な学習の時間について

総合的な学習の時間の実施も4年目を迎え、1～3回生については、3年間の大きな流れがほぼ出来上がった。来年度以降、新たな取組として5回生の「下関への提言」、5～6回生で行う「卒業研究」があるが、生徒の課題設定能力、問題解決能力、レポート作成能力、プレゼンテーション能力等の成長を見ると、生きる力を育む「海峡学」は、大変有効な手段であると言えよう。そしてこれが本校の6年間の中高一貫教育のメリットを生かせるところでもある。

来年度以降、総合的な学習の時間における高大連携の可能性についても研究を進めていきたい。同じ市内にある下関市立大学で行われている「地域学」に関する取組と、本校が「海峡学」で行っている取組で共通する部分が多く存在すること、また、中国からの留学生や、中国へ留学している大学生が多いことなど、共通の素地があることから、連携の可能性を模索する価値は多いにあると考える。

(3) チューター制について

本校の特徴的なシステムであるチューター制は、昨年度から現在のような形になっているが、今年度は学級担任の呼称もなくし、チューター会の良さを全面に引き出した運営を心がけてきた。アンケートでは、前期課程の生徒の80%、保護者の84%が、チューター制というシステムを支持している。しかし、チューター会とクラスの関係や、チューターとクラス担任の役割分担、チューター会の時間の在り方等については、現在の形が最終的にベストなものであるとはまだ言えず、生徒にとって効果があり、組織としても動きやすい形を再検討し、早く安定した形にする必要がある。また、6学年あると、各学年の生徒の発達段階や取組にも大きな違いがあり、6学年全て同じやり方で通すのは厳しい。チューター会運営にも柔軟性を持たせ、生徒の実態に応じた実施内容を考えていく必要がある。

今年度から教育課程の関係で、3回生以上はチューター会の時間が減り、4回生以上においては日々朝・夕10分間しかチューター会の時間がとれなかった。これまでにはなかったこのような短時間のチューター会の時間の中で、少人数集団を生かしてどのような活動ができるのか、各教員がアイデアを出し合って活用手段を見いだしていかなければならない。

(4) リトル・ティーチャー制について

今年度、数学でリトル・ティーチャー制を授業の中で実施し、実技を伴わない教科においても様々な学習効果があることがわかった。6学年の生徒が在籍する中等教育学校の特性を生かした取組でもあり、学習の場における上級生と下級生のかかわりはお互いに有意義なものとなることがわかった。さらに他の教科で実施できるかどうか、今後も引き続き研究を進めていく。また、昨年度に引き続き実技・実習を伴う理科・体育でも実施したが、単元や指導内容、リトル・ティーチャーになる生徒は異なるものの、教員側が昨年度の指導経験があるため、昨年度課題であった事前指導での時間や労力の負担はかなり少なくなった。今後も実施する教科、学年や内容、評価等についての研究を継続していく。

今年度、研究開発の延長指定を受け、これまでの3年間で実施してきた研究の検証を行うとともに、教育課程をはじめとして、本校独自の特色ある取組を積極的に進めることができた。

研究の過程において、先頭を走る学年が行った取組の内容について、P-D-C-Aサイクルを繰り返しながら毎年改善を重ねてきた。その中で、研究開発学校運営指導委員会や学校評議員会等において、外部の方々から本校のめざす方向性について多くの指導・助言をいただいたことは、具体的な取組を実践していく上で、非常に有益であった。また、本校は、新しい学校であるだけに、既存の基準に従うだけでなく、適切な修正を加えながら本校の特色を生かした効果的な教育課程・教育方法を研究開発してきたが、このことにも大きな意義があったと考える。

4年間行ってきた研究開発も残すところあと2年となったが、本校の6年間を見通した「一貫性、継続性のある効果的な教育課程及び指導方法の研究開発」には、まだ実践していない取組もたくさん残っており、今後も全校が一体となって中等教育学校の特性、地域の特性を生かした教育課程・指導方法等の研究を進めていかなければならない。それにより、「確かな学力」と「豊かな人間性」を備えた人材が育っていくと確信している。